幼児の教育 第93巻 第6号 平成6年6月1日 毎月1回1日発行 昭和23年4月15日第三種郵便物認可 ISSN0289-0836

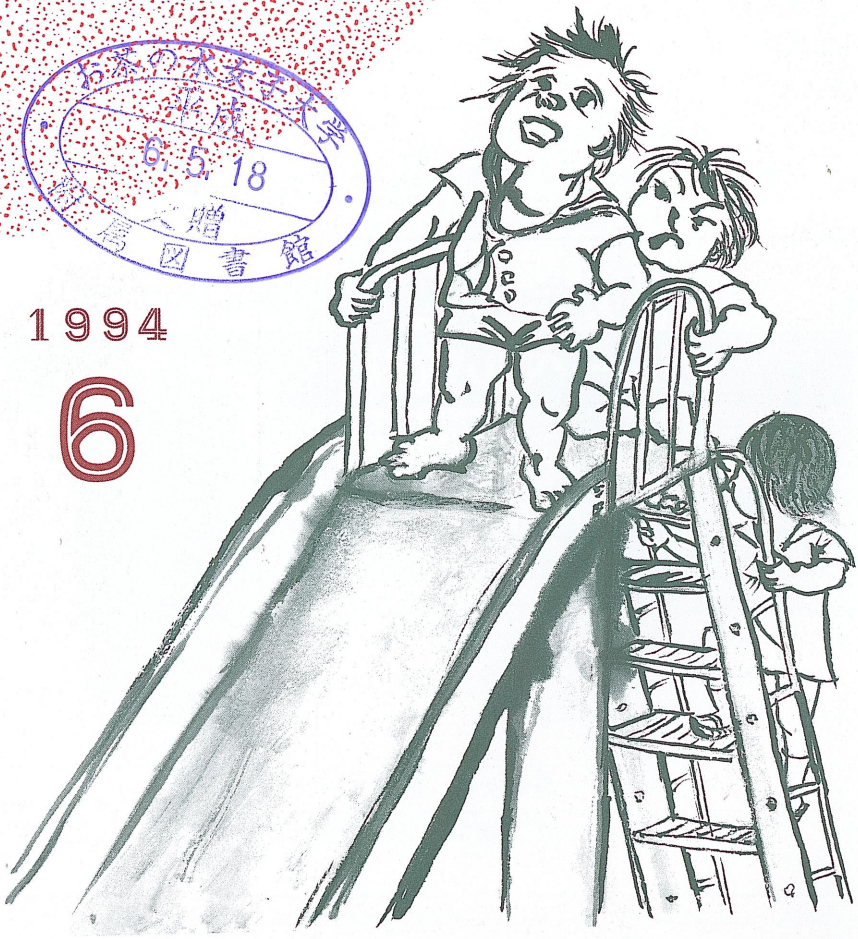
家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

お茶の水女子大学
平成
6.5.18
受入
附属図書館
寄贈

1994

6



第93巻　第6号　日本幼稚園協会

子どもに生きた人・倉橋惣三

―その生涯・思想・保育・教育―

フレーベル館創業
85周年記念出版

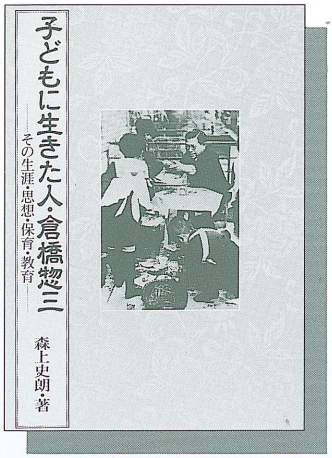
倉橋惣三研究の決定版！

◉写真多数　◉新発見の資料の紹介
◉完全な文献、著作のリスト
◉現代に生きる保育理論の解明

今ほど倉橋惣三の保育理論、教育理念を必要とされる時代はないと言っても差支えないであろう。この偉大な先駆者の汲めども尽きぬ先見性に基づいた理論と人間的魅力のすべてを解き明かした書を、保育界すべての方々におくる。

森上史朗・著

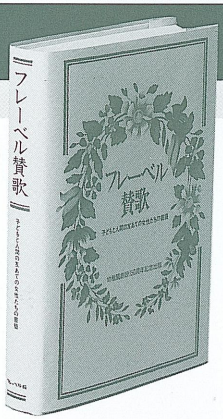
A5判・492頁・上製・定価3,800円（税込）



フレーベル先生・幼稚園創設150周年記念出版

フレーベル賛歌

―子どもと人間の友あての女性たちの書簡―



旧ドイツ民主共和国アカデミー文庫と、バート・ブランケンブルクのF・フレーベル博物館に、フレーベルにあてた教え子たち約200人の1,000通を越える書簡が収蔵されています。一部公刊されていますが、それらを除いた約140通の書簡がドイツ幼稚園創設150周年を記念して1990年に出版されました。本書はその完訳本です。

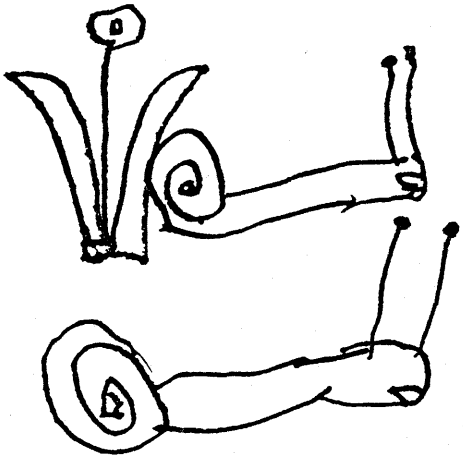
岩崎次男　他16名・訳

A5判・420頁・写真資料32葉・定価4,000円（税込）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第93巻　第６号

幼児の教育　目次

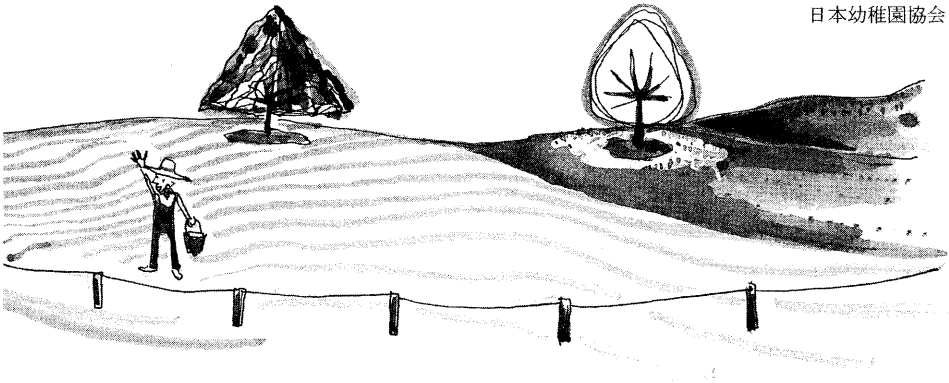
――第九十三巻　第六号――

子どもが夢みるささやかな幸せ……津守　真…（4）

子育てと夫婦の連携(2)
子ども達のSOSのメッセージより……池田　秀子…（11）

特集〈暗い〉
星明かり、雪明かり……林　完次…（20）
インテリアデザインと「暗い」……長山　洋子…（23）
山陰は暗い？……小坂　恵子…（27）
暗さもつつみこむ園生活……藤野　敬子…（30）

© 1994
日本幼稚園協会



「暗い」は大事……大多和　檀…（34）
「暗い」オランダ……向山　陽子…（36）
「暗い」感覚……田中　平八…（40）
家庭科教育の男女共修をむかえて(2)
男女共修がはじまった高校現場からの報告……大塚須美子…（47）
ある日の育児日記から(42)……佐藤　和代…（56）
子どもたちと私たちの生活……福永　恭子…（57）

表紙・梅田　なほ／扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／田代和美
桝田　正子・田中三保子
編集部・大沢　啓子

子どもが夢みるささやかな幸せ

津守　真

ひとつの光景

Yくんが保育室のテーブルでカップラーメンを食べていた。傍に座っている私の顔をときどき見上げて、にっこりと笑う。心から嬉しそうで、私も幸せな気分になる。このカップラーメンは、昨日、母親とおつかいにいって買ってきたもので、家に持ち帰ると、「あした、おべんとうもっていくの」と言って自分のリュックにしまったのだという。学校にくるとすぐにそれをリュックから出して、私にお湯を注いでくれと言ったのだった。昨日から、学校で食べようと楽しみにしていたその時を、この子どもはいま味わいつつ、カッ

プラーメンを食べている。変わりばえのしない、いつもの保育室であるが、温かな幸福が漂っているように思えた。

ことばを話さなかったYくんは、だれかが自分の物に触れたり、大人に伝えたいことがあると、大声を張り上げた。その子が思い切って三語文を話したのは、余程、自分の思いが心の中にふくらんでいたのだろう。あした学校に来て私と一緒にこのテーブルで食べようと待っていたその瞬間がここにあった。

そこに別の子どもがきて、Yくんのカップラーメンが欲しくて手を出した。私はYくんのこの時をこわしたくなくて、その子の手を押さえた。Yくんはそれを見ながら食べ終わると、カップの底に少しラーメンを残して差し出した。その子にも、分けて貰ったとの気持ちが伝わったのだろう。受け取ると静かに食べて立ち去った。

保育の場面は、外側から観察すれば、その人の規準でいろいろに評価して判断されうる。しかし、どのひとこまにも子どもの心の思いがこめられていて、私共が大切に育てたいと思うのは、その人間の心である。

走る

Yくんは、この数か月間、ひる頃になると私の手をひいて外出したがる。その最初のときは、どこにゆこうとするのかが私に分からないうちに、この子は自分で門の鍵をあけて走り出したのだった。一番近くにいた私は、考える余裕もなく後を追って走った。まだ

幼稚部だけれども三年生位の体格のYくんは、私よりもずっと先を走りつづけて隣の公園を抜けた。私は走りながら、Yくんがときどき立ち止まって私を見ることに気が付いた。二度目から私は殆ど走らずに歩いてゆくことにした。いま、Yくんは、ゆっくりと歩き、ときどき私に手をつなぐ。追いかけられて、自分が思っていた所に到達する前につかまえられるという思いが、子どもを走らせることがわかる。

こうしてYくんは、まずマクドナルドにゆき、それからスーパーマーケットにゆく。マクドナルドで、Yくんは欲しいものを指さすのだが、最初はよく分からなくて、Yくんは大声を張り上げ、周囲の人たちを驚かせた。Yくんには目あてのものがはっきりとある。ポテトのMとバニラアイスクリームである。そのことが分かってテーブルについたとき、このときも、レストランのテーブルで私と向かい合って食べることが嬉しくて、私の顔を見上げては、何度もにっこりと笑った。祖父と孫が平和に食事しているように周囲からは見えただろう。

この子どもが走ったのは、こういう幸せな時を大人と一緒に過ごしたいという気持ちが心の底にあったのだろう。だれかと一緒に食事をかこむ幸せは、だれもの心の中にあるに違いない。走る先に求めているものは何なのか、外在する目標物だけではなく、それ以上のものが求められているのではないか。

買物

Yくんはスーパーマーケットに走ってゆく。スーパーマーケットは、子どもの目のゆきあたるところに欲しい物が満ち溢れている。三歳の孫と一緒にいったときに大変な思いをしたことが何度もある。Yくんが最初スーパーマーケットにとびこんだとき、孫で経験したときのように、欲しい物は買ってあげることによって、落ち着いて自分が欲しい物を見極める気持ちの余裕をつくろうと決めた。

その最初のときにYくんが籠に入れた物は、カレールーと、冷凍ポテトと、計り売りの肉だった。それにお菓子をひとつとると、スーパーの中を車を押して何度も回った後、レジにいった。Yくんはライスカレーが大好きである。結局、ライスカレーの材料を買って、家に帰るとすぐに母親にライスカレーを作らせたとのことである。毎回少しずつ選ぶものがかわるが、ライスカレーの材料であることは同じである。そのことが分かると、私もスーパーにいくのがらくになった。この点では、Yくんは自分の考えをはっきりもっていると言える。ただ、自分が納得できないことが起こると、大声を出してスーパー中の人の目をひき、更にそれが他人との間のもめごとになりそうになると私が止めるので、そういうときには余裕を失い混乱状態になってしまう。

あるとき、そんなことの後、公園に立ち寄ると、どうしても池の中にはいるという。私は、いつもYくんの考えを通してあげることが多いから、今日は私の考えを通させてもらうと説明して、半分ひきずるようにして学校に戻った。こういうときは私も疲れはてる。本人もきっと同様だろう。こんなことがときどきある。それでも学校に帰ると、Yくんは

私の後を自転車にのってついて回る。

パターンにはめようとする

Yくんは休みも多い方だし、私も用事で学校にいない日もあるが、毎週三日位はこうして一緒に外出する。毎回のパターンがきまってきて、この頃は気楽に外出できる。しかしときどきいつもと違うことが起こる。マクドナルドでハンバーガーがほしいときもある。それなのに私はいつも通りにポテトとアイスクリームを注文する。そのときには例の大声を出す。いつも同じと考えないで、毎回本人が選ぶようにしなければいけなかったと気付かされる。

ある一日、スーパーマーケットで、アイスクリームの大箱を籠にいれたときには、私は良い顔をしなかった。ところが、学校にもどるとすぐに、Yくんはその大箱を保育室の机の上に出した。皆におやつを振舞いたいのだということがすぐに分かった。お皿を出してきて、ひととき、彼のまわりに他の子どもたちが賑やかに集まり、Yくんは満足そうだった。以前は、自分の物に他の子がちょっとでも手をふれると大騒ぎになったのに、スーパーで買物をするときにすでに他の子と分けようということがYくんの頭にあったことが分かる。

こんなことを通して、私は今日も昨日と同じに事が進むことを期待して、子どもをそこにあてはめようとしている自分に気付かされた。子どもは毎日違うことを考えている。保

育者は、毎日同じように事が進んでいると安心する。だが、一日、一日、違う日である。

裸になる

Yくんは外出からもどると、庭のやや高い所に吊るしてあるハンモックの上に毛布と布団をもってゆく。そして服も下着も全部ぬいではだかになり、私の手をひいてハンモックの上にのり、毛布にくるまる。私の弁当もそこに持ってこさせて、一緒に食べることもある。もう二週間位つづいている。毛布にくるまっても冬の戸外は寒い。ことに陽がかげると急に冷えてくる。それでも、Yくんが裸ですり寄ってくると、じかに肌をふれようとする親しみを覚えて、私もそう簡単に脱出するわけにもゆかない。

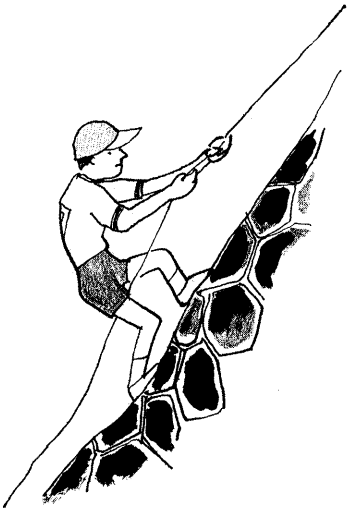
子どもが衣服を脱いで裸になるときは、社会的束縛と心の束縛もぬぎすてて、さあ、これから思う存分に遊ぶぞという時である。いろいろの子どもを見ていて、このことはまず間違いがない。

Yくんは、以前には、いつも背中にリュックサックを背負っていて、遊ぶときも、帰るまでそれをおろさなかった。私は、彼が背負いきれない程の心の荷物をかかえているように思え、それから解放されることを願っているのだろうと察していた。このことを私は本誌の昨年の八月号（92巻8号）に記した。いま彼はリュックを背中からおろし、衣服も脱ぎすてている。

そのときに彼がしたことは、買物とレストランの食事だった。外出したときに、歩き回

るのではなく、電車を見にゆくのでもなく、このことを選んだということは、Yくんが家族一緒にレストランで食事をしたり買物にゆく光景を夢みていたのだろうと思う。けれども、そういう社会的場面では、彼は意図せずして悶着を起こしてしまう。おだやかにそれをなしえたとき、この子は幸せであった。Yくんの心には変化が起こりつつある。私はこの子の夢を叶えてあげたいと思う。

（愛育養護学校）



子育てと夫婦の連携(2)

子ども達のSOSのメッセージより
一児童臨床家の立場から(註1)

池田　秀子

はじめに

育児は人格形成に関わる大事業であると言われています。ですから『手塩にかける』という面が必要かと思います。手塩にかけるとは、〝自らで手を下し骨を折ること〟と辞典には記されています。

私は十数年教育相談や児童相談所の臨床の現場で子どもの心の治療に携わって参りました。現場に於ては、不登校やいじめの問題、家庭内暴力、盗みや非行、チック、吃音、集団不適応等々の沢山のケースを経験します。いわゆる子どもの心の問題です。心理学の立場から見ますと、人間の行動には必ずある目的や意味があると言われています。子どもの問題行動というものも、子どもが『自分らしく生きられなくなってきた』ことの、心のSOSのサインだと解釈されています。子どもから周囲に「助けて！」「ちょっと苦しいョー」という信号が送られて

いる訳です。そのSOSのサインが何を意味し、どうして欲しいのかを周りの大人達がキャッチ出来るか否かが、治療のポイントになります。治療とは、それを親と治療者とが協力して捜し出す作業なのです。治療体験からは、子どもの問題行動の大部分は乳幼児期にその原因となる核が見出されます。それも、乳幼児期の母子関係に起因しているものが多いのです。また仮に他の原因によるものであったとしても、現在のお母さんの対応が変化することで、その子どもの今の問題行動が収まっていく例を幾つも経験しました。そういう意味で、お母さんは子どもの心の『特効薬』と言えるのかも知れません。

こうした私の現場での治療体験をもとに、子ども達のSOSのメッセージを通して、子育てに於ける夫婦の連携の在り方を考えてみたいと思います。

（予めお断りしておきますが、実例はそのままの原型ではありません。プライバシー等配慮し、ある程度の変更や抽象化を行っています）

（1）母子一体感の基礎作り

乳幼児期にお母さんは無償の母性愛で子どもの心に〝お母さん〟という『心の基地』を作ってあげることが、とても必要です。お母さんと子どもの間にまず絶対的信頼関係のパイプを作ることです。この絶対的信頼関係を作る為には、お母さんは赤ちゃんの要求に百パーセント合わせてあげなくてはなりません。真の母性愛は、自分の事をすっかり忘れて子どもを〝思いやる〟ことだと言われていますが、その様な神々しい心は日常の忙しさの中で無縁になる時もあるかもしれませんが、その時にはお母さんは赤ちゃんの為に「我慢して堪(こら)えるんだ」と思って下さい。お母さんの都合に合わせるのではなく、赤ちゃんに合わせて、しっかり可愛がって下さい。

〝人見知り〟という現象があります。（生後約八～十二か月頃）これは知らない人を見て赤ちゃんが泣くと言う現象ですが、これは赤ちゃん自身が自分にとって大切な人がわかったということで、育児上重

要なポイントとなります。どんなに泣いていても、お母さんが抱けば泣きやむ、つまり〝お母さんが一番だ〟と赤ちゃんから認められたことを示しています。ここに至るまでは、とにかくお母さんは赤ちゃんの要求を無条件にすべて受け入れ、母性愛で包みこんであげることが必要だと思います。こうしてこの時期に母子間に、しっかりとした信頼のパイプを作り上げておくことが、後に人間への信頼感の基盤となり、人格形成上大切な原点となります。実際の相談例のうち、母子関係のパイプが欠落しているものが、大半を占めているという事実からもその事は明白と考えられます。

＊

☆A君は小学校三年生の男児です。盗み行動が止まらず、叱っても叩いて聞かない子どもでした。A君は二歳年上の兄の下に生まれた男の子で、両親共々次は女の子を望んでいたので、A君が生まれた時、お母さんは思わず「エッまた男！」と叫んでしまい、看護婦さんに叱られたという事でした。お母さんは娘気分の抜けない華やかな雰囲気の人で、子育ては嫌いだったそうです。お母さんの実家の庭続きに住んでいたこともあり、お母さんがA君の面倒を見なくても誰彼となく周りの人間が世話をしてくれたようでしたが、A君にとって〝特別な人〟はいなかったようです。お母さんはA君に手を掛けなかったので、赤ちゃんの頃の記憶は殆どありません。A君には当然「人見知り」という現象も起こりませんでした。A君は幼児期、我儘で言うことを聞かず、お母さんとしては可愛く思えず、相性の悪い子だと思っていたそうです。お母さんと治療者との話し合いの中で、小さい時にお母さんがA君への愛情を与え損なった事にお母さん自身が気付き、その修復にその時点から努力するようになって、A君の行動は少しずつ快方に向かいました。

＊

☆B君は、朝になると暴れて登校出来ない小学一年生です。その原因をたどってみると、B君の出生時にお母さんが病気になり、一年間入院生活を余儀なくされたと

いうことがわかりました。たとえ事情があったとしても大切な時期に、母と子の信頼のパイプができなかったことには変わりなく、このケースの原因を作っていたのです。

＊

このようなケースに出会うたびに、母と子の関係は何と重要なのだろうと考えさせられます。父親に関しては、一般的に乳児期の父親不在は、そのことが母親の感情を刺激し、母子関係を歪めない限り直接影響を与えるとは考えられないと言われています。(註2) しかし、現代の若いお母さんにとっては、この時期に休みもなく、無条件で赤ちゃんを受け入れて、自分を抑えて育児をすることは難しいことかと思います。お母さんがこの時期に良い育児ができる為には、夫であるお父さんがお母さんの精神面をしっかりサポートしてこそ、初めて成されるものだと思います。「大変だね。夜中に起こされて！　良くやってくれてありがとう！」などと妻を労り、妻の大変さをしっかり受け止めて、共に子どもの成長を喜び合うという妻への精神的サポート、という形での育児への参加が、この時期の父親には必要とされている、と考えます。

(2) 父と母二人三脚でしっかり躾をする

しつけには、「おはよう」「ありがとう」の挨拶から、規則正しい食事や睡眠の習慣、トイレでの排泄の習慣など色々あります。本来しつけとは、縫い目を正しくするために、予め仕付け糸で縫い押さえておくということからきている言葉なのですが、きちんとした人間になる為に予め親が教える道筋、と言ってもよいでしょう。子どもにとっては、乳児期のように、欲した時に自由に飲んだり、寝たり、いつでもおむつの中でおしっこが出来たりする方が楽で心地好いに違いありませんが、「大好きなお母さんが、トイレでおしっこをすると〝おりこうさんね〟といって褒めてくれるから」「大好きなお父さ

んが〝ダメだよ〟というから我慢しよう」等と思って、お父さんやお母さんのしつけに従うようになるのです。大好きな人に褒められたいという気持ちは大切なことです。今度は子ども側が我慢する番になったわけです。こうして人間の社会生活に必要な我慢する力や自制心を育てていくのですが、その根底には「大好きなお母さんだから、大好きなお父さんだから」という愛情のベースが必要です。叱ることが、しつけとは限りませんし、むしろ両親の模倣が、しつけとなることが多いでしょう。怖いから従うとか叩かれるからやらない、というのでは、本物の心の成長には役立つ事が少ないと思います。「厳父慈母」という言葉があります。現代では子育てに於ける父性は必ずしも父に、母性は必ずしも母にというように堅く考える必要はないと思いますが、子どもに正しいことを教えるためには、片方がしっかり叱って教えたら、片方の親は叱られてうち沈んでいる子どもの気持ちをしっかり受けとめて、包んであげる役割分担が必要かと思います。

＊

☆C子ちゃんは、小学校一年生の夏頃から週に一、二回しか登校しなくなりました。C子ちゃんは「子どもを育てたい」という気持ちが全然沸いてこないお母さんの子どもとして生まれました。赤ちゃんをどう扱って良いか分からないお母さんでしたが、初孫だったので、おじ

いちゃんおばあちゃん叔母さん達が、可愛い可愛いと言って育てました。C子ちゃんは枠なく育てられたので、求めるままに何でも与えられ、叱られることも我慢することもありませんでした。そのうちに、C子ちゃんにとって、好きなことは楽なこと、嫌いなことは面倒くさいこと、になってしまいました。お父さんは、これではいけない、と感じたことがありましたが、少しでも叱ると、叱られた経験のないC子ちゃんは、物凄く傷つくようで、叱ることもできなくなってしまいました。学校に入ると規則の連続です。とてもC子ちゃんは我慢が出来なくなりました。特に給食は何も食べられませんでした。嫌いな物が余りにも多かったのです。

＊

この例は極端かもしれませんが、現代の、子どもを叱らない風潮と、又いわゆる「褒める教育」が正しく理解されずに行われることによって、我慢する心が育たないままに大きくなる子どもが時々います。物質面の豊かさや、兄弟数が少ないということも、子ども達から我慢する心を養う機会を奪っているのかもしれません。

(3) 子ども一人一人をよく見つめる

子どもは心のSOSを「問題行動」で表現すると言われていますから、その時々の子どもの様子をよく見つめることが大切です。一方的に親の方針に合わせたり、他の子どもと比較したり、育児書の平均値に振り回されたりしないことが大切だと思います。その子、その子の、成長のカーブがそれぞれにあるのです。気に掛かる行動が、その子に見出されたなら、その行動をすぐに叱ったりせず、まずその子をよく見つめて〝どうして〟そのような行動をとったのだろうかということを、考えてみることが重要です。必ず子どもの欲求不満の原因である〝何か〟がその行動の裏側には隠されているはずです。しかし、子ども自身、その欲求不満が何なのかが自分自身では明確に解っていないことが多いようで

す。それは意識下の世界のことが多く、子ども自身も言語化する事は困難なことが多いからです。

＊

☆D君は小学校一年生の男の子です。吃音がひどく、入学以来教室では一言も発言せず、夜中に怯えて泣き出すまでになりました。D君は大事な一人息子として両親に大切に育てられました。お母さんはキャリアウーマンでしたので、D君は0歳児から保育園育ちでした。お父さんは芸術家の自由業でしたので家にいる時間も多く、家事や育児も上手で、D君もお父さんが大好きでした。いつもお父さんと一緒のお父さん子でした。この両親には、理想の子育て論があり、D君を個性豊かに育てたいという願いが強く、D君が周りの子ども達と同じように振る舞ったり、D君に他の子と同じようなものを持たせたりすることは、特に嫌っていました。しかし本当はD君としては、友達と同じものが持ちたかったし、授業参観も本当は友達と同じようにお母さんに来てもらいたかったのです。でもD君はお母さんの都合や要望を察して、「いいよ！　平気だよ！」と心を装って、両親の方針に同調してきたのでした。この両親はよく議論する夫婦でもありました。議論ですから意見が合わない時もあるのですが、D君としては、その気配を不安に思い、何とか自分が両親の調節をしなければと子ども心に思い、ふざけて両親を笑わせたりして気を遣っていたのです。D君の問題行動はその様な心の無理がオーバーフローした結果でした。一年生のD君はお母さんへのラブコールをしていたのです。

＊

また中学生の反抗期に見られる行動などは、よく検討して見ると、社会や親への不条理に対する反発の表現であることが多く、「お父さんラブコール」のSOSの場合があります。

＊

☆E君は、有名私立中学の二年生で、小さい時から成績優秀で良い子でした。突然中学二年の夏休みから学習意欲がなくなり、髪を赤く染め、注意をすると母親に暴

力を振るうようになりました。E君の行動は、親のレールに従って反発もせず良い子をやってきたそれまでの自分が急に嫌になり、自分の思った通りに生きたいんだ、という叫びでした。それは嫁姑関係を上手に生きている母（表裏を使い分けているようにE君には見えるようになった）の行動に対する反発がきっかけで起こった事でした。又それは、仕事の忙しさで家庭のことから逃げている仕事一筋の父に対する攻撃でもありました。お父さんがこのE君に真正面に向き合うようになり、E君の問題行動は解消の方向に向かいました。

＊

この様に思春期の問題行動は、現代の弱体化した父性に対する抗議である場合が多いように思います。社会的役割をしっかりと教えるのに、この時期の父親の役割は思うよりずっと大きく重要なのです。

（4）父性と母性の調和

小学校二年生のF子ちゃんは、学校から抜け出して家へ帰ってしまうことが続き、先生方を慌てさせました。小学校四年生のG君は、お母さんまで突然居なくなってしまうかもしれない、という不安感に襲われて学校へ行けなくなりました。F子ちゃんもG君の場合も、お父さんがある日、突然家から居なくなってしまった、という両親の離婚が原因だったのです。

幼児期に全く理由が分からず親が家から居なくなることは、子どもにとって大変な喪失体験になるのです。また記憶には残っていない乳幼児期に、両親が離婚した場合でも、その頃の母親の心理が極めて不安定であった為に、母子の基本的安定感を確立することが出来ず、その後遺症が思春期のケースとして現れる例も幾つか経験しました。両親が離婚に至らないまでも、両親の〝調和〟が崩れた時に、子どもが問題行動を起こすという例は枚挙にいとまがない程です。優秀な小学校五年生のI子ちゃんの毎晩

の夜尿が、両親の〝不調和〟と、見せかけの家族団欒のせいであった、という例もありました。

むすび

子育てには昔から、父と母、〝両方〟の関わりが大切なことが謳われています。それは父と母、それぞれの役割や関わりに〝違い〟があるからだと思います。その違う〝両方〟が子どもの心の発達には必要なのです。私の臨床体験からは、乳幼児期の子育ての「主役」はお母さん、子どもが「受ける役」、お父さんは「見守る人」、そして思春期から青年期の「主役」は子ども自身、お父さんが「受ける役」、お母さんは「見守る人」であってほしい、と提案します。しかし現代の日本では、社会に出て働く女性も増え、仕事を続けているお母さんも多数います。乳幼児期に培わなければならない母子の基本的安定感を築くためには、社会的な育児休業制度の充実が切に望まれますし、又、育児の大変さに苦慮して不安な育児をしている若いお母さん達をサポートしてくれる社会的援助の制度なども望まれます。

そして、子ども達は常に父と母「両方」のバランスのとれた愛情の下で育てられる事を切に望んでいるように思われるのです。

(註1) 児童臨床というのは、問題行動のある子どもを対象として、親に対してはカウンセリングを、子どもに対しては、遊戯療法などの精神療法を行うことを言う。

(註2) 小嶋謙四郎『母子関係と子どもの性格』川島書店

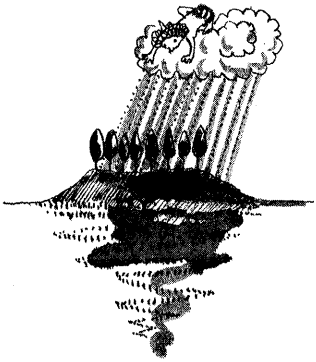
《参考文献》

河合隼雄『家族関係を考える』講談社現代新書
新田慶『若い女性のための家族関係学』日本評論社

特集〈暗い〉

星明かり、雪明かり

林　完次



静寂な夜の音

毎月のことながら、月のない時期になると外に目をやってはそわそわ。

観天望気である。テレビの天気予報で気圧配置が西高東低の冬型になったのを確かめると、そそくさと撮影器材を車に積み込み八ヶ岳方面へ向かう。

まだ陽のあるうちに目的地に到着し、ロケハン場所を選定する。ポットに用意した熱いコーヒーをすすりながら、茜色に染まった西の空の微妙な色の変化を楽しみながら星の出を待つ。もっともお気に入りで、心落ちつく時だ。

山間の里は日の暮れが早い。が、星の出も早い。

西の空に赤味が残っているうちに、すなわち漆黒になる前の群青の空に星が瞬きはじめる。大気の透明度が高く、灯火が少ないためだろう。星はまだ遠く小さいが、そうなるとのんびりしていられず活動を開始する。あらかじめセットしたカメラのアングルをきめ、シャッターを切る。ひとコマの露出時間は、ときに一時間以上のときもあるが、晴れているときは夜明けまで何回となく同じことを繰り返す。

人っ子一人居ない山ふところの真っ暗闇——。あるのは自分と満天の星だけ。よくもまあ、好き好んでそんなところへ行くね。などと軽口をたたく友人もいるが、いやいや、そうではないのだ。耳を澄ますと、いろいろな仲間がいることがわかる。野兎の来訪、犬の遠吠え、チチチと鳴く鳥（それとも虫？ほとんど一年中お目に、いや、お耳にかかっているが真面目に正体をつきとめようとしないので、いまだに何であるのかわからない）。ときには、けたたましく大地を駆け回る猪の蹄の音も。

さらには風でざわざわ音をたてる樹林もあるが、音の極め付きは地球の回転音だ。夢中でカメラのシャッターを切っていると時の経つのも忘れがちだが、星の動きがそれを教えてくれる。星の日周運動は地球の時点によるものなので、星の動きを見ていると、地球が回転する音が聞こえるような気がしてならない。

昼間の星見

星の光はあまりにかぼそいため、洪水のように光あふれる都会ではほとんど見ることができない。

ところが大気の澄んだところなら、昼間でも星が見えるのをご存知だろうか。金星である。夕方西の空に見えるときを宵の明星、明け方東の空に見えるときを明けの明星というので、さしずめこれは「真昼の明星」と名づけたい。

見つけ方はいたって簡単。あらかじめ天文年鑑などで金星が太陽からどの方角に何度離れているかを

調べておく。あとは青空を仰ぎ太陽を目安にそのあたりを注意深くさがす。これだけで鋭眼の人なら二、三分で見つけられる。太陽の光がまぶしいときは紙を丸め、望遠鏡のようにしてさがすのもよい。

そうそう紙筒といえば、お風呂屋さんの長い煙突を使うという似たような方法もある。煤だらけの真っ暗な長い煙突――これはもう巨大な望遠鏡だ。ひょっとすると、昼間でも金星以外の星が見えるかも。

だが状況はそれほど甘くない。勝手に心を躍らせても、近ごろはお風呂屋さんもめっきり少なくなったし、こんな不真面目な目的のために煙突を使わせてくれるわけもない。が、もし使ってもいいという太っ腹のお風呂屋さんがいたら、ぜひともご一報を。ワイワイやりながら、昼間のスターウォッチングを楽しもうではありませんか。

さて星の等級は、一等星は六等星の百倍明るいということが基準となっている。光度が一等級違えば、明るさは計算から約二・五倍違うことになる。すなわち二等星は一等星より二・五倍暗く、三等星より二・五倍明るいことになる。

金星の光度は平均でおよそマイナス四等。ということは一等星のちょうど百倍明るいわけで、昼間見えるのも納得がいく。

ところで金星の光輝がどれほど鋭いか、経験したことがある。いつものように山間で星の撮影をしていたときのこと、夜明け近くに金星が東の空に姿を現した。その輝きは、まさに明けの明星にふさわしい。ギリシャ語で〝焼きこがすもの〟というセイリオスから名づけられた大犬座のシリウスより、光の強さは格段に違う。暗闇に慣れた目にはまぶしいとさえ感じる。

気がつくと、金星の光で微かながら影ができているではないか。まさか――近くの灯火による影ではないか、あたりを見渡すがそれらしきものはない。紛れもなく金星の影だ。太陽は日影、月は月影、と

なれば金星は金影だ。一等星百個分の光量はだてではない。

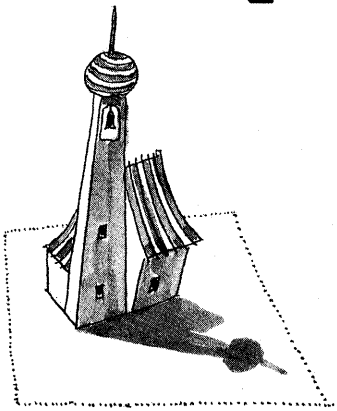
その金影も数日後の降雪で姿を消した。雪明かりに、明けの明星もちょっぴり照れたのだろう。輝きはいつもよりソフトに見えた。

（写真家）

インテリアデザインと「暗い」

長山　洋子

インテリアデザインとは、そこに住まう人々にとって快適な環境を創りだすことです。人間の五感にかかわる全てがそのデザインの対象になり、機能や使い勝手だけでなく、美しいものは何かを自由な発想で追求することだといえます。「暗い」ことも



インテリアをデザインするための重要な要素になっています。そこで、暗さを生かすとは、どのようなデザインなのか考えてみることにします。暗さを生

かすとは、光が創る明と暗とをデザインすることで、光をコントロールすることによって、その空間に適応した光の環境を創りだすことです。

光には、自然な光と人工の光があります。自然な光の環境には、窓の形状等、建築の建物にかかわる部分とカーテン等、インテリアにかかわる部分とがあります。生きて動いている光をどのように取り込んで、どのように受けとめるのかが、インテリアのデザインを決定する一つの要素になります。人工の光の環境には、光源の見せ方、光の溜め方、影の創り方等があり、それらを計算してその空間に適した光を創ります。

暗さを生かしたデザインは、日本座敷にも見ることができます。床の間と掛け軸の取り合わせ、窓や障子のありよう等が巧みに計算され、明と暗が創りだす美しさを生かすようにデザインされています。谷崎潤一郎は随筆「陰翳礼讃（広辞苑では、陰翳を薄暗いかげ転じて、平面でなく深みのある事とあります）」の中で「日本人は、陰翳の秘密を理解して陰翳の中に美を発見し、その美を求めるために陰翳を利用している」と述べ、日本家屋に代表されるモノとモノが創りだす明暗の美しさに感嘆しています。

日本座敷の中でもとくに、茶の湯の座敷は、茶の湯に最も適した微妙な明暗を創りだすように工夫されています。裏千家の「又隠（ゆういん）」は内部は四畳半で、極めて低い天井と、二つの下地窓が、ほの暗く引き締まった空間を構成しています。さらに、化粧屋根裏に切られた突き上げ窓が、ほの暗い室内に明暗の効果を演出しています。茶室のほの暗さは、窓からの光を巧みに受けとめ茶室に表情を与えています。茶の湯では、余寒の時節に催される「夜咄（よばなし）」の茶事があります。手燭や行燈などの夜燈のもとで行われる茶事は、道具にも、ため塗、金欄など、夜燈の中で一層引き立つように、取り合わせが考（か）えられています。茶室は、昼なお暗い室内と意図的にデザイン

された窓から差し込む自然の光を取り込みながら、作為的に創りだされる空間の微妙な表情の変化を楽しみます。茶の湯では、昼と夜とで、趣の異なった明暗の表情を演出します。計算された茶室空間の美しさを演出するために、ほの暗さは重要な役割を果たしています。

このように、大人にとって好ましく思われる暗さを生かした空間ですが、子供の心にはどのように映るのでしょうか。心理学的なことは分かりませんが、私が子供の頃祖父母の家で体験した薄暗い茶室の印象は、恐怖に似たものがあったことを思い出します。祖父母の家は古い数奇屋造りで、座敷は昼間でもなお薄暗く、シーンと静まり返ってしまた。老夫婦二人だけのその住まいは、いつも子供の声が賑やかな下町の我が家に比べて静かすぎていました。特に、祖母の愛用していた茶室は、お茶のお稽古がない日は、緊張感があって近寄りがたいものがありました。こわごわ覗いてみると、薄暗い部屋の中で、正面奥の床の間がさらに暗く深く沈んでいて、掛物だけが浮き上がって見える不気味な光景が眼に写りました。今思えば、床の間は、日本座敷の作りだす明暗の中の最も暗い部分にあたり、窓の障子は、そのほの暗い中に柔らかい光を与えていたと思います。しかし、子供の頃の私は、暗い所は怖い事のように思っていましたし、お仕入れお化け（悪戯をすると暗いところに閉じ込められてしまい、そこに居るお化けに食べられてしまう）等のように、暗いところは、怖いものが存在すると思っていました。私が、そこが怖い場所だと思わなくなったのは何時の頃なのか思い出せません。薄暗い空間は、幽霊を連想させて、ただの恐怖の対象でしかありませんが、ほの暗さを生かしたデザインは、安心感の伴う安らげる空間になります。

暗さに対するインテリアデザインを、少し違った視点から見てみることにします。デザインを伝達するための透視図と、そこに表現される暗さについて

考えてみました。透視図は、紙に三次元の空間を立体的に見えるように忠実に描くものです。近くにあるものは大きく、遠くにあるものは小さく描く等、決められた約束に従って描いていきます。さらに、モノを立体的に表現したい時に、明と暗を描き分けします。たとえば、球を描く時など、ただ丸く描くだけですと、人間には平らな円にしか見えませんが、光のあたる部分は明るく、影になる部分は暗く描くと球に見えるようになります。透視図の画面では、空間をよりそれらしく見せようとする場合、光や影等が有効に作用しています。

ここで、新たな疑問が生じました。それは、透視図法に従って空間を描いても、その透視図は表現したい空間の大きさを正確に描けるのか、また、その透視図を見た人が正確に空間の大きさを想像することができるのか、ということです。さらに、実際の空間を体験して、その大きさを把握しようとする時、どこを見て、どのように認識するのか、光や影はどのように影響しているのか、人間が空間を立体的に認識できるようになるのは何歳位なのか等々です。

現在、人工現実感システムをインテリアデザインやその教育に応用するための研究を行っています。それは、仮想空間を実際に体験することができる装置なのですが、人間が、提供された映像の空間をどのように知覚するのか、今後の課題になっています。

暗さのありようは、人間の空間認知や快適感に対して重要な役割を果たしています。今後、私も、暗さのありようについて、大いに悩まされることになりそうです。

（文化女子大学　住居学研究室）

山陰は暗い？

小坂　恵子

山陰という言葉や響きから、どんなイメージをかきたてられるでしょうか。東京にいた頃、出身地を聞かれて、鳥取県と答えると、

「鳥取？　ああ、山陰の……」

とかえってくるのが、ほぼおきまりのパターンでした。そして、

「冬、雪が降って、暗くて、海が荒れていて……」

とつづくのも毎度のことでした。もちろん、鳥取砂丘、松葉ガニ、二十世紀梨などの名前も出ましたが、それらは単発的で、どうしてみんな演歌の歌詞みたいな情景しかわかないのだろうと思ったものでした。

たしかに、冬は、太平洋側と日本海側ではっきりお天気が分かれることが多いものです。天気予報でしばしば目にするのは、太陽の絵に対して、雪だるまや雪の絵。これを実感したのが、受験のために、冬、はじめて山陽側に出たときのことでした。特急に乗って中国山地を越え、それまでの雪空から抜け

るような青空への変化を目にしたときは、頭ではわかっていても、大きなショックでした。生まれ育った者でさえこんなですから、遠く離れて住む人々が、心理的に暗い印象を持ちがちなのも仕方のないことなのかもしれません。

しかし、山陰の名誉のために記しておきたいのですが、冬は、荒れる日ばかりではありません。雪の積もる日もありますが、冬型の気圧配置がゆるんで穏やかな天気になった日の空は、やさしい水色。この小春日和を楽しみに冬を過ごしています。そして、もう都会では少なくなってしまった、星空を楽しめる環境が、そこかしこにあるのです。山陰には、陽光の明るさ、そして夜の闇が、自然とともにまだ残っていると言えるのではないでしょうか。

暗がりから出てきた妖怪たち

「ゲゲゲの鬼太郎」をご存じでしょうか？　作者の水木しげるさんの出身地鳥取県境港市に、「水木しげるロード」ができ、鬼太郎、目玉おやじ、ねずみ男をはじめ、漫画でおなじみの妖怪たちが、かわいらしいブロンズ像となって道行く人たちを楽しませてくれています。妖怪がかわいらしいとは、奇異に感じられるかもしれません。けれど、台座の上の身の丈一五センチメートルほどの小さな像は、そのおどろおどろしい姿にもかかわらず、ユーモラスさえ漂わせているのは、白昼、多くの人々に愛でられているからでしょうか。

近年、水木さんの自伝的小説をテレビドラマ化した、「のんのんばあとおれ」がＮＨＫで放映されました。視聴なさった方も多いことと思います。劇中、主人公の少年に妖怪話をする年配のお手伝いさん、〝のんのんばあ〟のモデルは、水木さんのおばあさんだと聞いたことがあります。幼い頃、おばあさんが語ってくれたちょっとこわい昔話や迷信、その登場者たちが、後年の「ゲゲゲの鬼太郎」のキャラクターとなったのだそうです。思えば、この〝の

んのんばあ〟のようなお年寄りは、幼い頃、身近にいて、子どもたちが好きなちょびっと怖い話をせがむと、いろいろと語ってくれたものです。当時、ちょっとした行事には集会所を使わず、持ち回りで個人の家に人々が集まったものでした。子どもたちも、友だちのだれそれの家となると大人についてやって来ます。寄り合いの間、子どもたちが退屈しないよう、子守代わりにいろいろと面白くも怖い話をしてくれるのが、このようなお年寄りたちでした。話を聞いていると、明るい部屋ににぎやかに人々がいるのに、思わずゾクッとして、背後に暗闇が忍び寄ってくるように感じたものでした。

いい加減眠くなった帰り道、集落とはいえ、農村のことですから、一軒一軒の敷地も屋敷も広く、点在しているところに、街灯もほとんどなく、軒先の小さな灯の他は、星明かり、月明かりを頼りに歩くのです。道の両側に竹やぶが覆い被さっているところを通り抜けるとき、先ほどの話が思い出されて、竹やぶから何か出てくるのではないか、追いかけてくるのではないかと、大人の手をぎゅっと握りしめ、目をしっかりつむって歩いたものでした。

けれど、この暗闇も、蛍とりのときには、よき友でした。学校で場所と時間を約束して出かけて行くとき、竹やぶは走り抜けるものの、獲物にわくわく、お年寄りの話は、必死で思い出すまいとしたものでした。小川に舞う蛍の光の点滅は、美しく幻想的で、今でも懐かしく思い出されます。

蛍といえば、こんな経験もあります。大山山麓の少年自然の家に、児童たちと行ったときのことです。夜は、おきまりの肝だめし。施設は、いわば野中の一軒家ならぬ山中の一軒家のようなもの。下流の集落を見下ろす田んぼ道から雑木林を抜けて宿泊先まで帰るのがコースです。出発前にいくつか怪談を聞かされてスタートするのですが、途中の林道が、鼻をつままれてもわからないような闇なのです。はじめて歩く道ですから、暗がりを手探りの状

態で進むところにふと見えた光が、数個。一瞬の後にそれは、ゲンジボタルらしいとわかったのですが、この時ばかりは、どきっとしました。明るい玄関にたどり着いたときは、心底ほっとしたものでした。

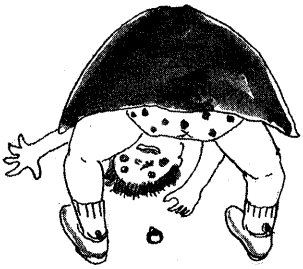
子どもたちは怖い話を喜ぶのも、暗がりをのぞき込むのも、そばに大人の手や明るい安全な場所があり、すぐに逃げこめるという確信があるからではないでしょうか。「トイレの花子さん」は、あっという間に全国の学校に伝わりましたが、かつてお年寄りの話に息をつめて聞きいっていた子どもたちのように、怖がりつつも明るく楽しんでいるように見受けられます。媒体はかわっていくものの、いつの時代も、子どもたちは、闇を創りだし感じ取る名手なのかも知れません。

子ども時代から遠く離れた今、思い返してみると、いつの間にか、暗がりに何かいると想像することもなくなり、怖がることもなくなってきました。成長することは、闇を切り捨てて行くことなのでしょうか。そんな大人たちが、暗がりから妖怪たちをひっぱりだし、かわいらしく据えつけてしまったのかも知れません。

（小学校教諭）

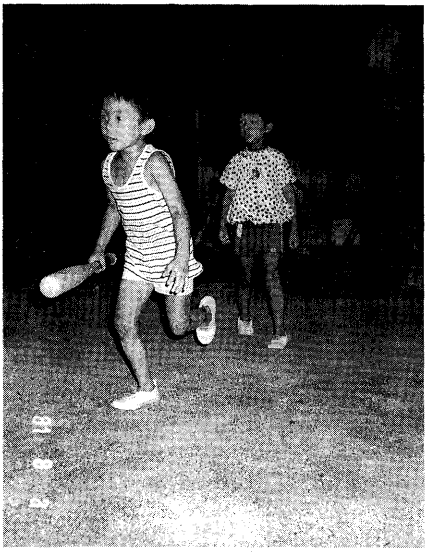
暗さもつつみこむ園生活

藤野　敬子



夜の暗がりに集う

駿府城址にある校庭で以前は夏の夜、小学生がテントを張って泊り、肝試しをしていたのに、町並みの照明が明るすぎてキャンプにならなくなり、物語に出てくる夜の闇を知らない子どもが増えてきた。そんな頃幼稚園でも郊外への移転を機に、夜の集まりが始められた。三時過ぎに園へ来て、夕食を手作りし、八時頃帰るのであるが、プールから出て、夕暮れの柔らかい日射しを浴びながら、兎を草むらに放ったりして、かつて子ども達が夕闇迫るまで遊びほうけた頃のようにすごす。夕空に映える山をベンチの上に立って並んで眺めていた子ども達、あまり汗もかかず、長々と伸びた影法師をおもしろがって野球をしていた数人が、ナイターをしたいと懐中電燈を持ち出したが、とっぷり暮れてしまうと、とても照らし切れず断念したこと、花火を終えて暗い林の道を戻る時、ふだん、それほど遊んでもいない者同士が、互いの手を握りしめていたこと等が思い出される。



▲ 暗くなって、ついにナイターを断念

家族ぐるみで集まる夏祭りの方も、次第に闇が濃くなってくると、人影は見えても見分けがつかない。近寄って相手が分かった瞬間は何ともなつかしく、教師と父兄、違うクラス等の隔たりが一遍に吹きとんでしまったことも忘れられない。

暗い所で遊ぶ

「もし、あなたが園を創るとしたら」というレポートの中で、学生が予想外に、暗い所を作っている。例えば「裏に、樹の茂みで暗い所があり隠れ家になる」「ガラス張りの天井にして光が一杯射し込むようにしたいが、雨や曇の日には、照明は使わず、暗いままで暮らすのもいいのでは?」「厚いカーテンを閉めると暗幕のように暗くなり、お化けごっこもできる」「天井裏にロフトがあり、独りでゆっくりいられて、小窓を覗くと遠方まで見渡せる」等である。土管のトンネルや、押入れのようなコーナーに身をひそめるのが好きな子ども達に、光や影を自然のまま肌に感じさせたいという思いのようである。

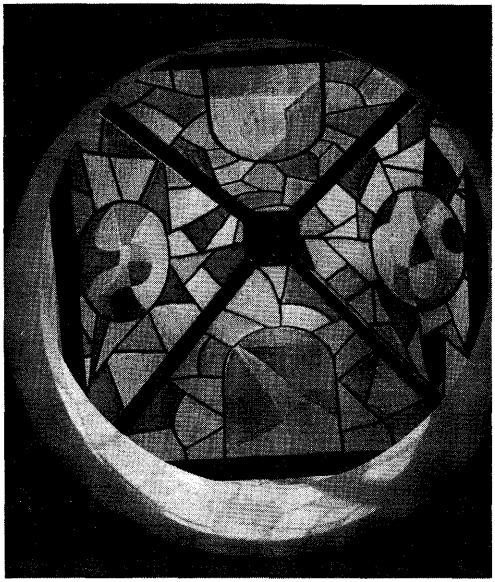
暗幕といえば、誕生日のお祝いの後で、スライドを映す予定だったが、暗幕の調子がわるいので朝、試運転をしていたら、閉まったまま動かなくなったことがある。思案にくれていると子どもが、暗いのなら、本物のローソクをつけたいと言い出した。円形の空き缶を探して裏にローソクが立つように工夫し、暗がりにゆらめく炎を、そっと吹き消すさまを見守る時の雰囲気がよくて、次回は小麦粉粘土の色どり美しいケーキにローソクが立てられた。暗さを即座に生かしたのは子どもの方だった。暗幕を子どもでも開閉できるようになってからは、色んな遊びに頻繁に活用されるようになっていったのである。

暗い所と明るい所

静岡大学の附属幼稚園から六本木の東洋英和幼稚園へ移って驚いたのは、真昼でも暗く、照明をつけて保育していることだった。旧宮家の跡地で、ひときわ高い石塀がめぐらされ、生い茂った樹々に囲まれ、建物の庇(ひさし)も長い。屋内はすべて板張りで木の建具である。コンクリートの白壁やサッシュのように光る部分がないので暗く感じる。庭に面した廊下も、壁の所は暗い。車に友達を乗せてバスごっこをしていた子どもが廊下を往復しながら、陰に入ると

「夜ですよ」、ガラス戸の所へ出ると「朝ですよ」と連呼して遊ぶ姿もあった。

吹き抜けで高いホールの天井や保育室にも明かり採りの窓はあったのだが、いつしか光を通さなくなっていた。そこを新しいのに取り換えた時、子ども達とステンドグラスを作ってみたことがある。透明の薄板に色を塗って厚紙の枠に張った物を持って、先ず二階へ上がり、低い窓をまたいで一階の屋上へ出る。高い枝に実ったビワの実を取る時のコースで、そこは陽光がさんさんと注いでいる。ここに人工の川を流し、水浴びができたらといつも夢の拡がる場所である。その屋上に突き出ている窓へ紙枠を張りつけ、保育室に戻って仰ぐと、手作りとも思えぬ美しい光が射しこんでいる。夜のまに強風に吹きとばされ、消えたステンドグラスを探して園庭を駆けめぐることもあった。



▲ 手作りのステンドグラス

絵本棚がじゅうたんの周りにあるホールの一隅や、織物等をする廊下の突き当たりには、ランプシェードの美しい大型のスタンドが置かれて一層の光と趣きをそえている。そんな様子を見て来園者が「暗いけど落ちつきますね」と言われる。どことなく暗い教会内部とステンドグラスを連想させる。夜のクリスマス礼拝、追分キャンプで、ファイヤーの後、闇を通って戻った小部屋で子ども達と膝つき合わせて祈る時や早朝の林の中の礼拝等、今も深く心

に残っている時が暗さとつながっているのも不思議である。

時間と場所の他に、表情の暗さもある。家庭の状況や塾通い等で緊張を強いられがちな子どもに、園では身も心も晴々と遊んでほしいと願うが、暗さもあって当然なので、それをそのまま、安心して出せるようにしたい。ふとした表情の陰りが、少しでも癒される場になったら、どんなにいいだろうかと思う。

「暗い」は大事

大多和　檀

「暗い」からイメージされることの一つに「怖い」がありますが、これは保育の中で結構大事な事ではないかと考えています。

私は常日頃、子供たちにまず必要なものは、土・水・太陽と思っていますので、入園から天気の良い日は砂遊びや水遊びなどを中心に過ごしています。そうして自然の変化―曇りの日、雨の日、寒い日など―を体で感じ始める頃、また友だちとのかかわり

も楽しいばかりではない時もあると感じ始める頃、子供たちが見つけてくるものが、「暗い」ことです。「今日は暗いね」「ここ暗いね」「何か出てきそう」「何があるんだろう」と……。

私が昨年三月までいた園では、こんな頃になると暗い所から「大多和ゾンビ」なる者が出てきました。姿形は大多和先生なのに、目が変で、「ゾンビ〜〜〜」と怖い声で言うのです。これが出ると子供たちは一目散に他のクラスの先生の所に逃げて行きます。何人かは「怖くないもん」とヘラヘラ笑いながら近付いてきますが、更に「ゾンビ〜〜〜」と抵抗せずに寄って行くともう大変です。顔が真剣になって逃げ出します。みんな集まって「ゾンビは明るい所が嫌いなんだ。だから明るい所に逃げよう」「光る物に弱いぞ」と先生と相談して金紙で武器を作る人もいます。

機を見て（ここが難しいところです）「みんなどうしたの」の大多和先生に戻って登場すると、一斉に「大変だよ、ゾンビが出た」「顔は大多和先生そっくりなの」「黒いもん着てた」としゃべりまくり、泣いてだっこしてもらっていた人は今度は大多和先生にだかれます。そしてゾンビの出た暗い所に金紙をはったり、懐中電灯を持って見に行ったりして「もう大丈夫」「怖かったね」と言いつつ日常の遊びに戻っていきます。

なぜこんな遊びをするのか？

それは明には暗が、強には弱が、長所には短所がというようにすべて一方が欠けていては成り立たない、人の生活とはそういうものなんだということ、そして明は暗に支られている、だからこそ暗いものに「おそれ」の気持ちを持ってほしいのです。

自分の心の中に何か、「怖い」と思う気持ちをほんの少し持って生きてほしいと思っています。

ですから幼稚園という場も、全てが明るくきれいで美しいというのではなく、暗い所、きたない所もあってほしいと思います。人間が生きて生活してい

ればどうしても避けられないのですから。

もう一度、ゾンビ遊びのことですが、この「ゾンビ」は、それまでの保育の中で「自分は先生から受け入れられている、愛されている」と子供が感じ、自分のクラス以外にも、「頼れるところがある」という条件がなければ出現しません。そうした「明るい」生活がなければ、保育者同士にも「明るい」関係がなければ、ゾンビはただ子供を怖がらせるだけです。「明るい」があってこその「暗い」で、その「暗い」があってこそ「明るい」はさらに「明るい」となる、だから「暗い」は大事と。

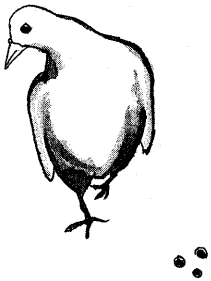
（東京都港区立神明幼稚園）

「暗い」オランダ

向山　陽子

「ああ、オランダに帰ってきたね」

視界一八〇度全てを覆い、どんよりした曇り空と、見ていてあきない程、常に変化する厚い雲。陸路でも、空路でも、オランダに入るとため息と共に行手を覆う空を見て（オランダでは、空は見上げなくともよいのです）つぶやいたものです。そして、次のバカンス＝南への旅まで、この天気に負けずにがんばろうと気をひきしめるのです。昨年の夏は、



夏がなく、つまり晴れた気温の高い日（高いといってもせいぜい25℃）がなく、オランダ人にもノイローゼ患者が大勢出たと聞いています。

オランダといえば、風車とチューリップと明るいイメージを持っていらっしゃる方々には申し訳ありませんが、もう少し、どんよりとした暗いオランダを紹介しましょう。

日本ではあまり人気のないフランドル派の絵画を思い起こして下さい。暗ーくて、「雲が風景になる」フランドル地方を私達に教えてくれます。

泥低地で、じゃがいもしかとれない暗いこの地に生まれたゴッホが、太陽の光にあふれたアルルに憧れ移り住んだものの、次第に精神を病んでいったのも、この地に四年半も住んでみると妙に納得できます。私には、ゴッホにとってアルルは明るすぎた、太陽が多すぎたのだと思います。私だって、フランドル地方に二年も住んだ後では、フランスを車で走った時、その明るさ、実り豊かな大地、青すぎる空、あまりに屈託なく笑う陽気な農夫達がまぶしすぎて、「あゝ、私、ゴッホになっちゃう」と叫んだのですから。

五年前の四月。世の中は浮き浮きと、桜の花の下新しい門出ににぎわう日本から、どんよりに加えて、季節の変わり目の雨風の強い日が毎日続くオランダへ渡った頃を思い出します。

家々の庭に咲き乱れる、水仙、チューリップ。道端のハマナスの垣。雌雄呼びあう鳥の声に目をさます毎日。自然は、空がどんなに暗くても、春が来た事を告げてくれ、曇り空の異国での生活への不安な心に光を与えてくれました。半年続く、暗い冬が去って、春が来る喜びを、オランダの人達は体中で表します。太陽の有難さを、身にしみて知っています。太陽の出た日の少なかった夏の次の冬は、風邪をひく人が多く、乳幼児やお年寄りは、命とりになるというのですから。

お隣のおじいちゃんは、庭仕事のたびに声をかけてくれました。青空が出ると "Yoko, It's a beautiful day!!" と。そして、太陽の動きを追いかけて日向ぼっこがはじまります。まるで向日葵のように、午前は前庭で椅子を回して、午後は後庭でという風に。

洗濯物は、室内の方が乾燥しているので、室内に干すことが多くなります。一年の半分を占める冬は、とにかく太陽が出ないのですから。夏、太陽が出た日は、洗濯物を庭に干し、カーテンは全て開けて、(大きな窓は開きません) 太陽の光を入れたものです。

スーパーマーケットのレジ係が、子ども達に手渡してくれる黒い飴は、ビタミンDとか。ビタミン剤は、必需品。そして、果物、ナッツ類、干しバナナ等の太陽の産物を〝好き嫌いではなく必要から〟よく食べました。意識せずとも多様な食品が得られ、さらに「おいしさ」を追求できてきた日本の自然の

▶ 冬の遊び。氷の上で遊ぶ子ども達

有難さを、又、意識せずとも太陽を浴びられる幸せを、帰国した今、意識して感謝する毎日です。

反面、オランダの人々は、「暗い」ことをも大切にし、楽しむ術を知っています。「暗」と共存してきた長い歴史は、多くの知恵と、豊かな思索を生んできたことでしょう。

室内の照明がそうです。天井の照明はなく、スタンド・ライトや、ランプによる間接照明がほとんどです。そして室内を、光と影、明と暗に演出します。街中も、むやみに明るくしません。必要なイルミネーションだけです。もっとも、店は、五時に閉店、日曜は休み、夜は、街中でも人影はありません。あるオランダ人は「むやみに明るくしてどうするの？　鳥がいなくなるよ、動物がびっくりするよ、花が育たなくなるよ、赤ちゃんが眠れないよ」とウィンクしてささやきました。

「暗い」を演出する最たるものは、ろうそくでしょう。北欧の人ほど、ろうそくの使い方が上手だと感心しました。贈り物にもろうそくは喜ばれています。パーティーの席でのろうそくは、テーブルを囲む人々の心を一つにし、暖かく、なごやかで、大人の女性を男性を美しくみせてくれます。

暗い日の多いオランダでは、それ故に、明るい日を心から喜び、太陽の光を体内にとり入れることに一生懸命になる必要がありました。と同時に、「暗い」ことにも、十分価値をおくことのできる、素敵な大人の方達と会うことができました。

光と暗に、同等の価値をおける人達の国は、世界観、人生観、子ども観、自然観……等々が、大人だなと感じるのは、私だけでしょうか。日本人だって闇を知っている奥深い人間のはずだと信じているのですが……。

「暗い」感覚

田中　平八

「暗い」の意味を辞書で引いてみると、第一義は、「光のさしかたが不足して、ものがよく、または全く見えない状態（岩波国語辞典）」と出ている。視覚の感受性が、ある一定の限界状態に近づいていることをあらわす表現である。しかしもっと興味深いことは、「暗い」は「暮れる」、「明るい」は「明ける」と同語源だというのである。私たちが抱く暗い・明るいという感覚は、取りも直さず生理学的事象の産物であるが、太陽や月の運行ならびに季節や天候など自然界の周期や変化とも深い関わりをもってきたことを予想させるものでもある。

明治初期に廃止されるまで長い間わが国で用いられてきた時刻表示法は、正午の言い方に今も残る十二支をあてるやり方と、午前零時をまん中とする時間帯を九つといい、ほぼ二時間単位で八つ、七つ、六つ、五つ、四つと減っていき、午後零時でまた九つとなり四つまでを繰り返す呼び方である。ところで今、一刻をほぼ二時間と述べたが正確ではない。時間配分の基準点は別のところにあって、一刻の長さは実際には周期的な変動を示すようになってい

る。「明け六つ」「暮れ六つ」の言い習わしの通り、日の出と日没をもって六つと決められていたのである。したがって、春分の日と秋分の日付近では、一刻は確かに二時間になるが、夏至近くになると昼の一刻は二時間半近くにまで及び、夜の一刻は一時間半ほどになる。冬至近くには昼夜の一刻の長さの逆転は最大となる。食事の間隔や労働時間の長さまで変わるわけだから、さぞ不便だろうと思うのだが、日常生活における日中と日没後の明るさの落差は、私たち現代人の認識をはるかに超えるものであったろう。真夏の昼光は十万ルックスにも達することがある。黄昏が迫ってきたといっても数ルックスあったりする。一方、月光は晴れわたった満月の下でも〇・二ルックス程度とされる。当時の代表的な照明装置であった行灯、提灯ないし蠟燭、囲炉裏の火などの暗さは推して知るべしであろう。経済的事由からも庶民が常時使用できるものではなかったはずだ。明ける・暮れる、つまり明るい・暗いを境とする生活パターンは本質的に自然な行動であり、それは百年ちょっと前までの日本人の普通の生活のリズムであったろう。時刻が制度化されていったときにそれが整合されていったに過ぎないのかもしれないのである。

暦の周期から「暗い」の意味が転じてきた例も、辞書に載っている。「晦日（かいじつ・みそか・つごもり）」とは、いうまでもなく月の最後の日のことであるが、月の満ち欠けの秩序にもとづく陰暦では、月末の夜には月はない。ここから「晦」という字は、晦冥（天地晦冥）、韜晦、晦渋など、くらい、くらます、はっきりわからないといった語彙をつくるようになったというのである。

光が届かない環境に長らく住んでいるため退化を起こしたような種は別にして、ほとんどの動物は明暗を感知する能力をもっていて、光に対する応答を適応行動につなげて対処するシステムを保持している。人間は火を燃やすことを発見した上に「飛んで

火に入る夏の虫」などという諺をつくるのであるが、どういう状況であっても遮二無二明るい方向へ突き進んで生き抜こうとする反射行動・本能的行動は、動物のもっとも原初的な活動で、「走性」と命名されている。

道端でみみずがのたうっているのに遭遇することがある。このみみずは昨夜の大雨かもぐらの急襲におびえて地上に跳び出してはみたものの、日の光の強さに慌てふためき再び地中にもぐり込もうと必死の試みをしているのである。みみずは皮膚一面に光を感じとる器官を装備しているから、動物学者の言う「負の走性」を働かせているのだが、アスファルト相手では文字通り手も足もでない。私たち人間のなすべきことは、柔らかな地表を見つけてすぐさまみみずを放り出してあげることである。下等動物の眼は、明暗を判別するだけの色素を含んだ窪みで、眼点とか眼胚と呼ばれるものが多い。例えばホタテ貝。食べるときには貝柱と分けられる貝紐、つまり外套膜には百個内外の眼点が備わっている。二枚の半開きした貝殻の奥から百目鬼のような目が外をにらんでいるのである。少し怖い情景である。

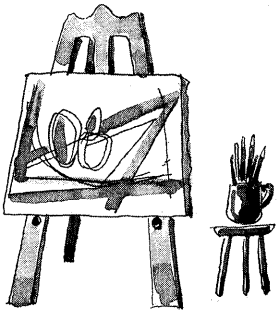
眼のしくみは動物各種各属で工夫を凝らしていて、その設計図の多様さに驚嘆させられるのであるが、今は人間の話であって、場所は再び晦日の夜に戻る。月光の威力もたいしたもので、晦日が晴夜で満天に星が輝いたとしても、地上の照度は千分の一ルックスの桁にしか達しない。しかし、こんなに暗い環境にあっても、私たちは周囲の様子をおぼろげながらに認識できる。

人間の眼は、眼球の角膜と水晶体がレンズの役割を果たして、外界からの光は網膜上に濃淡パターンの像を結ぶ。網膜の一層目には錘体と桿体という二種類の光感受細胞が備わっており、光の強弱とその性質について視覚系内を伝達する生体信号情報に変換するのである。

暗闇の中に満月のような明るい円盤が映ってい

て、それがどんどん暗くなっていく事態を想像してみてください。このときに「見えた」最小の刺激値を光覚閾（一般的には絶対閾）と呼び、感受性をあらわす指標とする。私たちが陽光の下から暗室の中に入ったとき、最初は眼の中が明るいもやのようなものにおおわれて、円盤も早い段階で見えなくなってしまう。しかし課題を続けていくうちに次第に見えるようになってくる。暗順応と呼ばれるこの過程は、日常生活でも映画館に入ったときなどによく体験する。暗順応の進行は最初の五分ほどでほぼ定常状態となるが、なお我慢して続けていくと、一〇分を過ぎたあたりからふたたび閾値の急激な低下が始まり、それは三〇分過ぎるまで継続するのである。そして結果的には、最初と比較すると千分の一ぐらい暗い円盤が見えるようになっており、視感度は千倍以上にも上昇する。この不連続性の正体は、錐体の暗順応が五分過ぎには終わって、その後でゆっくりと桿体が暗順応を開始するという二種類の過程が重なりあったものである。

錐体は高い解像力をもち色を識別するが、少しでも暗くなると働かなくなる。一方、桿体は無彩色で解像度も低いが、かなり暗い世界でも作動する。昼間しか活動しない鳥類には錐体しか備わっておらず、猿類は別にして哺乳類の多くは桿体のみである。人間はというと、網膜中心部に錐体が集中し、



周辺部には桿体が広く分布している。そこで、昼間は鳥ほどの高視力は無理としても色彩あふれた世界が許され、夜は夜で、犬猫よりは不便であるが、移動の自由ぐらいは保証されているのである。

夕闇が濃くなり、やがて夜の帳が降りる。それに合わせて、はじめ錐体は暗順応を開始して、でき得る限り豊かな視世界を確保しようとする。それもかなわなくなった頃、今度は入れ代わって錐体が暗順応を開始し、視感度だけは確保しようとする。両者の働きが入れ替わる頃の暗さは薄暮視と呼ばれ、車の運転がしにくい時間帯として注意が必要である。完全に暗くなった頃になると、今度はじっと目を凝らすよりは、錐体の部位を避けて視線を少し外して見るようにする方が効力がある。一方、明るい陽光のもとに急に出た場合には、数十秒で明順応を成し遂げ、眼は焼き付かなくて済む。太陽を直視したりしない限り、眼はそうとう強い陽光にも充分耐え得るのである。桿体で見ることができたもっとも弱い光から、痛みを伴わない明るい陽光の下まで、なんと一兆倍の明るさの差に対応できるのである。人間の視覚機能は、暗さ・明るさという次元だけを考えても、生態学的に実にうまく適応するようにできあがっているものである。

一八七七年に、ボルというドイツの生物学者が、カエルの目を暗い戸棚から出して眺めていたところ、目の奥の方にある赤みかがったものが明るいところでは薄くなっていくことを発見した。この有名な逸話は、眼に光が当たると化学的変化を起こすという事実の最初の発見である。つづいてキューネという人が桿体からこの色素を抽出することに成功し「視紅（しこう）」と名付けた。動物の種により色は異なるのだがこの呼び方は残っている。途中の経過を省くが、視紅は最終的にはビタミンAに還元される。逆に、暗くなると、漂白還元されたビタミンAから視紅を再生産することになるわけであるが、その過程はずっと時間がかかる。このようにボル以来今日ま

でに、明順応・暗順応の過程を示す眼の中での化学反応の一部はわかってきた。しかし、視紅は桿体の先端にしか存在しない。錐体には、いわゆる三原色に合わせた三種類の化学反応が起きることが予測されるが、その色素は未だ発見されていない。また、光化学反応が視神経伝達の電気インパルスに変換される過程の全貌は明らかにされていない。次代に残された研究課題は少なくないのである。

究極の暗さとはどのようなものなのだろうか。大学の「完全暗室」は三〇分もいると目がなれてきてあちこちから光が漏れてくる。照明設備のない鍾乳洞に親子で入ったことがある。曲がりくねったその奥で懐中電灯を消してみたとき、そのままじっと我慢していれば真の暗闇を体験できたかもしれない（一分ともたなかった）。しかし何といっても究極かつ永遠の闇の始まりは死の訪れであろう。では、鍾乳洞でその疑似体験ができたかというと実は不可能なのである。自動車はエンジンをかけると低速でアイドリングを続けるが、眼も同じように、光が届かないときでも緩やかな自発反応を繰り返しており、いつでも応答できるよう準備を怠らない。停止時のオートマ車がずり出すように、暗順応時での自発反応は、結果的に常時わずかに光の信号を送っているのと同じことになる。だから、暗闇の中ではいつもこの僅かの明るさを感じていることになる。この状態は「視灰（しかい）」と呼ばれる。こうした理由で、私たちは生存中には真の「暗黒」を体験することはない。もし私が穏やかに死を迎えることができたら、意識が遠のいていく瞬間に究極の暗さを体験してみたいと考えているのだが、結果を報告できないところが残念である。

話を締めくくるに際して、「暗い」が暗いことで積極的な意義を見いだしているような表現をみつけられればと、いろいろ探したり考えたりしてみたのだが、とうとう本当に終末になってしまった。幽霊が困るだろうとか、歴史は夜つくられるとか変てこ

なことがらが浮かんだりするけれども、その直後、明けない夜はないといった信条を思い出してしまって、あっさりと色あせてしまう。

西欧の表現でよく会うのは、暗闇の存在あるいは経験が光を思い起こさせてくれるので感謝するといった類の文章である。世界は光と暗闇・明と暗の対立からできていると考えるのは、古代ギリシアからゲーテの流れに代表されるような西欧思潮の基本的位相であるから、これは自然な発想には違いない。光は神であり、闇は煉獄という様式の認識の構図である。しかし、こうした両極性思考の外側にあった日本文化の中には、光と対比の闇ではなくて、「暗いのがいいのだよ」とする事例が一つくらい身近に見いだせないかと思ったのである。

課題ができなかったからといって、責任転嫁をするつもりではないが、本当はその前にもっと大変な事態が私たち周囲に及んできていることを発見した。日本では、人間の住んでいるところから、暗闇がどんどん退治され消え去っているのである。内外の照明は充分過ぎるほど普及した。建造物をつくればランプを取り付け、光線を照射する。滝までライトアップの時代である。たとえ「暗い」の意義を見いだしたとしても、これでは暗闇を探してまわらねばならない。実際にこうした環境になりつつあることは、線香花火をやろうとした人はすぐわかる。

暮れて夜になっていくときの情景は、宮本輝さんの小説『蛍川』の最終章がみずみずしくて素敵である。夜の闇は、次第に場面の背景として育っていって、最後のクライマックスシーンでは、題名から予想がつくであろう弱い光の群れとヒロインの印象を演出するのである。やはり夜は暗いもので、少なくとも光が闇に勝ってしまってはいけないのではないだろうか。

（東京都立大学）

家庭科教育の男女共修をむかえて(2)

男女共修がはじまった高校現場からの報告

大塚　須美子

(一) はじめに

第二次世界大戦後、戦前の家事・裁縫の流れをくんで新しく出発した家庭科は、いくつかの変化の波を受けながらこの四月からまた新しい出発点を迎えた。いままで女子のための教科として、家庭生活の実務を女子に修得させる役目をになってきた家庭科が、教育課程の改訂によりすべての中学・高校で、男女を問わずまなぶ必修教科となる。

この改革を推進する直接的なきっかけは、「女子差別撤廃条約」の批准であった。一九八〇年に日本政府がこの条約に署名したことで、この条約に批准するために国内法を見直し、男女雇用機会均等法を成立させ、家庭科履修の男女による取扱いの差別を廃止することにした。しかし、女子だけの教科でない家庭科への取り組みは、一九七六年からの「国連婦人の一〇年」を契機として、男女平等をめざす内外の要求と運動が盛り上がり、教育の分野でも真の

男女平等教育への取り組みの中で「家庭科の男女共修をすすめる会」も作られ、男女共学家庭科に向けて二〇年近い地道な努力がなされてきたことは、案外知られていない。そのような状況の中で、この二〇年間に京都や長野、東京などで共学家庭科を実践する高校が徐々に増え、成果をあげてきた。

(二) 高校における共学家庭科の歴史

共学家庭科の口火をきったのは京都であった。一九七三年の教育課程の改訂を機に制度化され、若干の職業科（水産・工業）を除く府立高校で家庭一般二単位を男女必修にしている。京都で早くから家庭科の男女共修が始まったのは、カリキュラム上男女差を付けず、すべての生徒に教育の機会均等を保証する教育体制をという民主教育の現れであったといえる。

また、この年長野や東京でも新教育課程の検討を進めていく中で、家庭科の男女共修を決めた学校があった。東京では商業や農業などの職業高校を中心に積極的な男女共修へり取り組みがみられたが、それまでの女子向け家庭科の内容では不十分な面もあることから、各校で教育内容の自主編成の取り組みがみられた。一九九一年には、共学家庭科の実践校を中心に、教員の定数枠外での家庭科教員の配置を教育委員会が打ちだした。このことが共学家庭科の完全実施に先立ち男女共修を推進し、昨年では都立高校の三分の一に当たる一〇六校に広がったと聞いている。

一方男女共修完全実施に向けて、解決すべき問題がいくつかあった。工業高校など男子が多い高校では、調理室などの実習室がない、またあっても狭いなど施設・設備の新設、拡充の必要があった。中でも予想される家庭科教員の不足の問題が一番大きかった。単純計算でも、今までの二倍の教員が必要

になるわけだが、はっきりとした教員採用計画はでていない。この二年間で例年の二～三倍の教員を採用したが、それだけでは一九九四年度以降に必要な教員数に対応できない。東京都では、生徒数の減少にともなう学級減をすすめてきたが、教科によっては必要数より多くの教員を抱えるいわゆる過員の問題がでてきた。その過員の問題と家庭科教員の不足の課題を結び付けてでてきたのが、家庭科教員養成事業であった。養成事業とは、他の教科の教員に一年間の研修で家庭科の免許状を与えようとするもので、現場の家庭科教員からは専門性を無視した安易な考えだと激しい反対運動が起こっている。現在、約二〇人の応募があり、この四月から研修はスタートした。このように、いくつかの問題が残されたまま、男女共修は始まった。

（三）家庭科教育がめざすもの

新教育課程では、「家庭一般」、「生活一般」、「生活技術」の三科目から一科目四単位を履修することになった。「生活一般」や「生活技術」は男子向きとして設定された教科のように思われる。教育目標に多少の違いはあるが、暮らしや家族・家庭生活に視点を置き、人との関わりや現在及び将来の生活への意欲を喚起し、豊かな人格の育成をめざすことに重点を置く人間教育となっている。家庭科が教育対象にしているのは、家庭生活だが、家庭生活では人間が生命を守り、新しい命を再生産する営みや暮らしが続けられている。家庭科教育はこの生命（いのち）と生活（くらし）の再生産に関わる文化遺産である知恵（科学）やわざ（技術）や伝統を次の世代に伝え、さらに発展させる力をつけることをめざしている。

今、なぜ男子にも家庭科なのかという問いかけを聞くことがある。私たちの生活や生き方は大きく変

わってきた。女性はいままで家庭の中にあって、家事や育児、介護を引き受けてきたが、女性の生き方の選択肢は広がってきた。結婚観や仕事に対する考え方が変化し、既婚女性が出産後も働き続ける割合も増加し、従来の「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業の見直しが求められてきている。また男性も、過労死などが社会問題となり長時間労働への社会的見直しの動きもある中で、家庭への復帰や地域社会への参加が言われ始めている。したがって、男子の家庭科履修には、家庭生活は男女が協力して築いていくことや、職業生活と家庭生活を視野にいれた生活設計を考えること、男子も生活の自立をはかり、生活に関する知識や技術を身につけることなどがねらいとしてある。

（四）K工業高校の家庭科

私が勤務している工業高校は東京の東部に位置し、比較的工業の盛んな地域にある。今年で創立七四年を迎え、化学を専門とする全国でもめずらしい工業高校である。生徒の多くは男子であるが、一学年（一九九三年度入学生は二〇〇人）に約一五～二

○人女子が在籍している。工業高校の中では比較的女子が多い高校である。生徒は化学分析やバイオなどの授業をとおして、ものづくりや工業化学、電気化学を学ぶわけである。生徒の多くは専門教科を学ぶべく目的意識を持って入学する生徒は少なく、成績で輪切りにされ、入学する学校はこの学校しかないという形で進路指導を受けてはいってくるのが現状である。したがって、専門教育以前の問題として低学力などの問題を多く抱えているが、生徒の多くは人なつこく、この学校に入っていきいきとする生徒も多い。週に二回（六時間）の工業実習などを含めて、生徒はあらためて体を動かしながら体験的に学ぶ機会を持つのであるが、反面工業の授業になじめずやめていく生徒もいる。また、中学時代から不登校などを繰り返したり、勉強に意欲が持てずに退学など進路変更する生徒も多い。

三年前に私がこの学校に着任した時、家庭科は女子が三年生で四単位履修していた。新教育課程の完全実施に先立っての家庭科男女共修を職員会議などで訴えたが、一学級三班編成で実習を行っている工業の先生から、工業並の条件整備を整えてから行うべきなどの時期尚早論がでたり、男女共修四単位を行う場合、どの教科の時間を家庭科に振り向けるかなどの論議になるなど、昨年度（一九九三年）男女共修二単位の家庭科を実現するまでにいろいろ校内での議論が必要であった。男子を教える機会は昨年の四月まではなかったが、三年の女子生徒の実態や他の先生方から伺う生徒の話から家庭科教育はできるだけ早く行う必要は痛感していた。親の離婚や死別、家庭に障害者がいるなど、家庭的に非常にきびしい状況で高校に通ってきている生徒がいる。現在の消費社会、物質主義に毒され目的意識が持てぬまま、自分を飾るためや遊ぶために必要以上のお金を遣い、そのために放課後はアルバイトに精を出す、

その結果家庭に帰っての自宅学習がなされていない生徒もいるなど社会のひずみや影響をもろに受けている生徒は多い。ややもすると安易な方向に流れやすい生徒に、自分自身の生活を見つめ、現在そして将来に向け主体的に生活を作っていく、そのために必要な知識や技術、考え方を身につけてほしいという思いで家庭科の男女共修はスタートした。

（五）始まった男女共修

昨年四月に二年生で二単位の家庭科男女共修が始まった。いろいろな不安や危惧する点もあったが、実習室が女子のみの家庭科を考えて作られていたため、物理的に狭いことで一学級を二班に分けて行う班別学習が認められたり、習熟度別授業のために配置された教員を家庭科で頂き、二人体制で始めることができるなど非常にめぐまれた状況でもあった。

指導内容を考える段階で生徒の実態を考え、基本的な知識や技術、さらには実際の生活場面で自分ならばどうするか、考え、判断し、実行できるような内容にと二人で基本方針をたて、一年間の指導計画をたてた。わが校では、共学家庭科がめざしている内容をよりよく具現できるようにと「家庭一般」を選択履修することに決めたが、指導要領ではその内容が次のようになっている。

①衣食住の管理　②家族と家庭生活　③青年期の生き方と結婚　④親としての役割　⑤将来設計と家庭管理　⑥家庭生活と環境問題　⑦生活機器の活用

指導内容は多岐にわたる。この内容を四単位で効果的に修得させるためには、教師の指導力が問われることになる。この四単位の内容から、さきに述べた視点で二単位の指導計画をたて、実施したのが次頁の表である。

高校での初めての家庭科の授業を積極的に受けとめてもらうために、家庭科を学ぶ目的、家庭科を男

	指　導　内　容	時間
一学期	オリエンテーション ○家庭一般を学ぶにあたって	1
	食生活（1） ○食べることの意味　　○健康と栄養 ○栄養所用量と食品摂取の目安 ○米の栄養と炊飯　〈実習1〉米飯、薩摩汁 ○卵の構造と調理性〈実習2〉親子どんぶり、即席漬	19
二学期	食生活（2） ○小麦の種類とその成分　〈実習3〉手打ちうどん、温泉卵、青菜のお浸し ○魚介類と獣鳥肉類について ○乳・乳製品について　〈実習4〉鰯のハンバーグ、カッテージチーズサラダ、ロールケーキ ○食生活の現状（食糧自給とポストハーベストについて）	12
	青年期の生き方と男女の性愛について ○性意識と性行動　○男女の性の違いと性愛について ○妊娠と出産　　○人工妊娠中絶と避妊について	12
三学期	家族と家庭 ○あなたにとって家族とは ○今、家族・家庭は　○明治民法と現行民法 ○結婚と離婚　　○婚姻の歴史	8
	家庭生活と経済 ○独立して暮らすためには ○カード会社とクレジット ○消費者の権利と消費者被害	6

女一緒に学ぶ意義などを中心にオリエンテーションを行った。「家庭科は女子がやれば良い、男はやる必要はない」などの声もあったが、「男女平等だから」「男も料理はできたほうがよい」「ひとり暮らしの時に役に立つ」などの肯定的な声も多かった。

授業をどの分野からはじめるか論議したが、男子にも抵抗なく受け入れられる食生活から入ることにした。包丁操作の調理技術のレベルを知るために、調理室の使用法の指導もかねてりんごの皮剝きを行った。廃棄率を計算し、自分の技術レベルを自己評価させた。班別での実習なので、一時間でほぼ一人一人をみて回り個人指導を行うことができたが、生活経験の差が歴然と現れた。この基本実習以外に、四回調理実習を行ったが、興味を持ち意欲的に取り組んでいた。調理実習全般をとおして、基本的な調理知識の欠如や技術的格差がみられた。また、味覚的経験の少なさや未経験な味や食品に対して拒否的であったのが気になった。昨年度は時間的な制約があり、献立作成や食糧自給率やポストハーベスト以外は現代の食生活の諸問題に十分取り組めなかったのが悔やまれる。

男女の性愛については、授業の導入として性に関するアンケートを取り高校生の性意識を知るきっかけとした。半数以上の生徒が高校生の性交渉を肯定していることから、男女の性愛のあり方、避妊、人工妊娠中絶などを取り上げた。性に関する意識や知識は非常に個人差がみられる領域で、授業に対して拒否的になる生徒もみられたが、男女がどのように人間関係を結ぶかという点は三学期の家族・家庭生活、結婚さらには乳幼児の保育と親の役割（昨年度は実施していない）につなげていく上で非常に力をいれていきたい領域と考えている。

三学期は生徒の卒業後の生活、特に経済生活や結婚、家族に焦点を当てて授業を行った。「ひとり暮

らしにいくらかかるか」は、卒業後は単身生活をしたいと考えている生徒も多いので、非常に意欲的に取り組んでいた。家族や家庭については現代の家族に関する言葉などから、現在の家族をとりまく状況を考えたりした。結婚では民法を勉強しながら、現代の結婚について考え、婚姻の歴史を学びながらこれからの結婚や家族がどのように変化していくか考えた。

（六）一年間の男女共修を終えて

こうして日々の教材研究と生徒のプリント類のチェックに追われながら、一年間の授業を終えた。この一年間の授業で学んだ事柄はひとりひとり違うと思う。命を守り、暮らしを見つめる視点を育てるために、どのように考え、どのように生きたいかつねに問いかけてきた。自分の考えを書いたり、発表することが苦手な生徒には非常に大変な授業だったようだ。ややもすると現状をそのまま受け入れ、自分の将来についても今から考えても仕方がないとしている生徒が多い。自分達が生活の主人公であり、社会をよりよい方向へ切り開いていけることをも知ってもらいたいと思う。真の男女共生のため、子供や高齢者、障害者などの社会的弱者の権利が守られる社会をめざして、男女共修となった家庭科の果たすべき役割と責任は非常に大きいと考えている。

（東京都立高校教諭）

ある日の育児日記から

(42)

佐藤　和代

圭は五歳、有は二歳になりました。今年の誕生日は、子どもにプレゼントを選ばせてみようか、というわけで、皆でデパートに出かけました。

おもちゃ売り場の入口は、遊園地のよう。初めて来た二人は、ものも言わずに突進、あちこちかけずり回ります。こんなに喜ぶとは、普段、近よらせないよう努力したかいがありました。

やがて落ちついたのは、有が電動自動車のコーナー、圭が人形コーナー。すごいのですね、最近の人形用グッズって。ブランドものスキーウェア、子どもとおそろいの服、本物そっくりのシステムキッチン…。有をさっさとお父さんにまかせ、圭と私で回ります。気分はすっかり少女時代。あれいいねー、これもいいねと盛り上がったのですが。さて「これにする」と言われると…。「六千円のドレスなんて、圭の服買えちゃう」「このアクセサリーは小さすぎるわ、有が食べると大変」「こんなキッチン、大きすぎて部屋にはいらない」…だんだん夢のしぼむ圭。ごめんね、買うときは、気分は少女時代とはいかないわね。

さて、その夜テレビを見て、もう「あれ欲しい」が始まった圭。「じゃ、次の誕生日に買おうね」「はーい」。この会話がまた一年続くのでしょうね。

ゆうのお気にいり。こんな大きいの部屋にはいるもんか

子どもたちと私たちの生活

福永　恭子

年長組になって多くするようになったのは、話しあいです。いろいろなことをみんなで考え、決めてするようにしました。子どもたちはよく考えて話をしますので、私には思いも寄らないことも出て来てびっくりすることもありましたし、子どもの本心を知らされてはっとすることもありました。

六月には、お父さん（お母さん）と遊ぶ会でどんなことをしたいかについて話しあいました。

外で遊びたいという子どもが多く、また一緒にしたいこともたくさん出ました。サッカー、野球、開戦どん、ドッジボール、宝さがし、砂遊び、絵を描く、ぶらんこ、鉄棒な

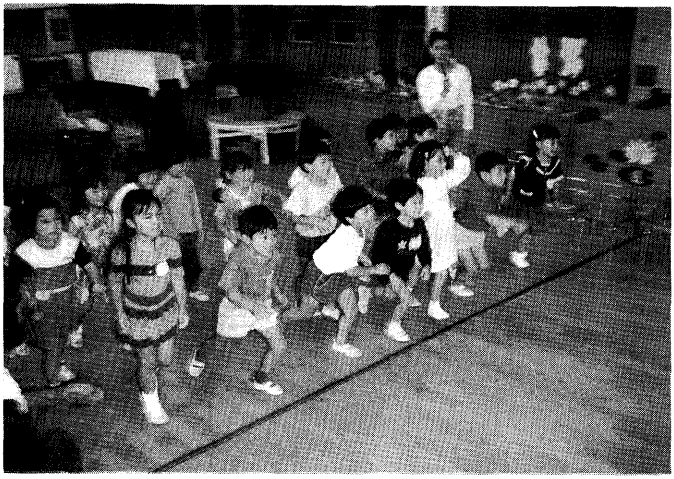
どなど。子どもたちは幼稚園でいつもしていることをお父さん、お母さんとしたいのだということがわかりました。私たち（年長組は二クラスでした）が考えたことも話していくつかに絞り、またみんなでやってみてできるかどうか、楽しいかどうかをみてみたりもしました。

話しあいながら決めていくのは大変でしたが、このようなことを通して子どもたちはお父さん（お母さん）と遊ぶ会を楽しみにするようになりました。プレゼントも自分で考えて作りたいということになり、毎日少しずつ作っていきました。

父の日の当日、午前中はよいお天気でしたのに、椅子などを運び出し始めた頃になって空が暗くなり、なんということでしょう、雷雨になってしまったのです。子どもたちが登園する頃には小雨になりましたが、結局部屋で遊ぶことになりました。

うれしそうにお父さん、お母さんと一緒に来た子どもたちは教会の聖堂で礼拝をした後、保育室に入り親子揃ってすわりました。はじめに宝さがしです。探す人たちは手で顔を隠して見ないようにし、隠す人たちはすぐに見つけられないように考えて隠します。親対子どもですので、お父さん、お母さんが探す姿をじっと見ている子どもたち。子どもが思いつかないような所に隠すお父さんたち。それぞれの目はとても真剣で、みんなが見つけることができて終わるとほっとしていました。

次は意欲満々の開戦どんです。狭い部屋ですのでクラス毎にしました。（親対子どもです）始まる前から子どもたちは興奮気味で



◀開戦どんの始まりです

す。自分のお父さん、お母さん、子どもに突進する人。じゃんけんに勝ってにこにこ顔の子どもたち。お父さん、お母さんも勝ち進むと力が入って来ます。一回戦子どもたちは惜しくも負けましたが、二回戦で勝った時の喜びようはすごいものでした。飛びあがってみんなで喜び、見ていた人たちも「本当によかった」という表情で拍手を贈って下さいました。

次は親子で「アルプス一万尺」を踊りました。足じゃんけんの時は床が揺れるようでしたし、勝って子どもに肩をたたいてもらうお父さんの大きな背中もうれしそうに見えました。

最後にみんなで写真を撮って終わりにしました。うれしそうに帰って行く子どもたちとお父さん、お母さんたちの姿、そしてそれぞ

れの笑顔がとても印象的で、雨のために外でできなかった残念な気持ちは吹き飛んでしまいました。

七月には、お泊まり保育について話しあいました。

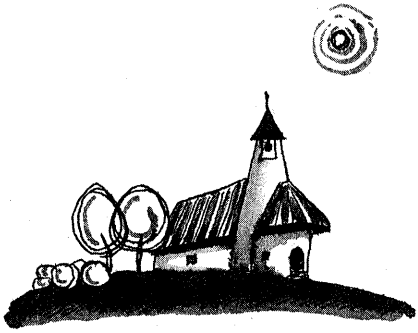
年長組の子どもたちが幼稚園に一泊して過ごすのですが、お泊まり保育の時にしたいことや食べたい物についても聞いてみました。兄や姉がいて話を聞いているのでしょうか、キャンプファイヤーやスイカ割りをしたいという子どもたちもいました。今年は例年よりも早く登園してカレーライスの野菜を切ることにしました。また今まで私たちがしていた劇や歌などはやめて、子どもたちがしたらどうかということになり相談しました。「劇や合奏や自分の好きなことをグループでしたり、お友達のするのを見るのはどうかしら」と話しましたら、「戦いがしたい」、「ペープサートがいい」、「人形じゃなくて人がする劇がしたい！」などの声が次々にあがりました。「戦い」と聞いて「あらら、大変、どうしよう」と思いながら、子どもたちの話すことを書き留めました。

降園後隣のクラスの先生と相談して、戦いをしたい男の子たちがたくさんいること、話の中で戦いが出て来るようにしたらできるのではないかなどを考え、子どもたちがどう具体化していくかを見ていくことにしました。

一人ひとりにしたいことを聞き、最終的にはペープサート、ピアノと合奏、劇二つの四グループに分かれました。ペープサートと劇はグループのメンバーで話を作りました。い

ろいろな話をどんどん考え出しますので、私たちはくっつけたり要約したりするのに苦労しながらもそのおもしろさに笑ったりして思わず力が入りました。戦いだけと言っていたグループもお姫さまが加わったりして変化に富んだ話ができあがりました。ピアノと合奏のグループではピアノを弾く子どもが曲を決め、それに鈴とトライアングルを合わせることにしました。

お泊まり保育の一日目、子どもたちは午後タオルケットとシーツなどの荷物と一緒にたくさんの期待と少しの不安を持って登園して来ました。カレーライスに入れるじゃがいもと人参を個性豊かに切った後は、お楽しみ会でする劇やペープサート、ピアノと合奏のグループに分かれ、おやつを食べてから準備に入りました。先生たち五人（年長組二人、年中組、年少組、フリー）もグループに分かれ、人数の多い方の劇に二人が入りました。年長組の担任以外の先生たちは、それまでの様子は聞いていたとはいえグループをまかさ



れて本当に大変だったと思いますが、楽しそうな声も聞かれ、短い時間にお面なども作って密度の濃い練習をしました。

スイカ割りの後は夕食です。食べられるだけの量を自分で皿に盛って席に着き「これ、僕が切った人参だ！」、「おいしいね」と言いながら、食べていました。外は霧雨が降っていましたが、子どもたちがテラスにすわってキャンプファイヤーをできるように写真屋さんとボーイスカウトの方がして下さり、予定通り楽しむことができました。

二日目の朝、くもり空で雨が心配でしたので海への散歩を近くの八部公園に変更しました。川沿いに歩いて公園に入り、野球場の内野席からグランドを見たり、芝生の上で遊んだりしてのんびりと過ごしました。

朝食後は「いつするの？」と待っていたお楽しみ会です。動物が出て来るペープサートは絵もかわいく言葉も一生懸命言っていました。二つの劇は話もわかりやすくよくできていて、心配していた戦いも本当にうまく演じていました。私は劇のグループには入っていませんでしたので初めて見たのですが、見ていても楽しむことができました。ふざけてしまうのではと思っていた男の子たちも引っこみ思案の子どもたちも、それぞれ役になりきって恥ずかしがらずにしていることに感心し、その子どもたちの別の面を見たような気がしました。ピアノと合奏は、速さが変わるピアノに鈴とトライアングルの子どもたちが上手に合わせていたのには驚きました。みんなの前で一生懸命にする子どもたち、興味を持って友だちのすることを聞いたり見たりする子どもたちからは時々笑い声も聞こえて来

る楽しい会になりました。

お泊まり保育が終わった後、無事に終わってほっとすると共にとてもゆったりとした二日間を過ごせたと思いました。それはなぜなのか。子どもたちと一緒に考えたり決めたりしながら準備をして来ましたので、いろいろなことがあっても子どもたちはお泊まり保育を自分のものにできていたのではないかと思うのです。子どもたちは自分たちのペースで、みんなと一緒に過ごすことを心から楽しんでいました。（勿論、そこには幼稚園の子どもたちみんなを六人の先生たちで育てていこうという姿勢と、いつも助けて下さるお母さんたちの支えがあるのですが）

子どもたちの成長の節目を感じながら、こうして一学期は終わりました。

（元・聖マルコ幼稚園）

編集後記

最近は、本当に暗い体験をすることがなくなりました。便利さと安全を求めて、光が夜の中にどんどん侵入してきます。こうなると、失った闇も大切なのでは、と思いはじめた人はきっと多いことでしょう。

「暗闇祭（くらやみまつり）」というお祭が、東京・府中の大国魂神社（おおくにたまじんじゃ）をはじめ、各地に残っています。祭の夜は、明かりを全て消し、人々は声も殺してひっそりと、神の渡御を待ちます。渡御の神事は、かつては一般の人々には見てはいけない禁忌ということだったのでしょうが、暗闇はおそれ多い神聖なものでもあったようです。

子ども達にとっては、暗い所はやはりこわい所です。想像力も手伝って、お化けや怪物がでてくるかもしれないし、見ないように目をつぶっていても頭の中にまで入りこんでくるのは、防ぎようもありません。

学童クラブの一年から三年までの子ども達をつれて、秩父にキャンプに行ったことがありました。そこでのメイン行事は〝きもだめし大会〟。電灯一つない山沿いの村の道を、三人一組で、目的地のお堂まで行き、行った証拠にビー玉を一つとってくるだけのことですが、これが子ども達にとってはこわーい体験でした。車の音も、風の音さえもなく、吹い込まれそうな静寂の中できこえるのは、自分達の足音と息づかいだけ。そんな静まりかえった一本道で、月の光がとても明るく感じられたのが、印象的でした。（K）

幼児の教育

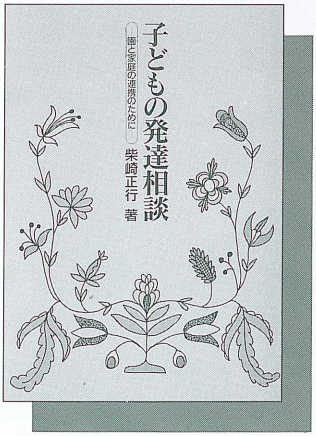
第九十三巻　第六号
（一九九四年六月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

発行　平成六年六月一日
編集兼発行人　本田和子
発行所　日本幼稚園協会
〒112東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社フレーベル館
〒113東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六〇四
振替口座　東京九―一九六四〇

☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

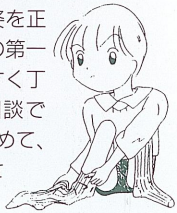
☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

子どもの発達相談 ー園と家庭の連携のためにー



園と家庭の連携は子どもの発達を正しく理解することからはじまります。そのためのハンドブック。

園の先生と、親とが子どもの育つ姿を正しくとらえ、理解することは保育の第一歩。90項目のポイントに分かりやすく丁寧な解説をつけた子どもの発達相談です。先生ばかりでなく、親にもすすめて、ともに読み合うこともできる幅広さをもった育児ガイドブックです。



柴崎　正行・著

A5判・240頁・定価1,800円(税込)

子どもの持ちあじを生かす園保育

一人ひとりの持ちあじを生かす園保育の考え方から実践まで。

早いけれど荒っぽいものを作る子、遅いけれどきちんと作る子など、いろいろな持ちあじの子の実践例を集めて、指導の基本をまとめた本です。
個性を育てる保育に悩んでおられる先生方におすすめします。

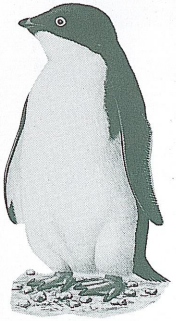
祐宗省三　編・著

A5判・240頁・定価1,700円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

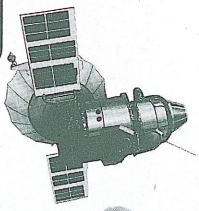
幼児の探究心を育てる図鑑、小学校の「生活科」にも役立つ。



ふしぎがわかる しぜん図鑑

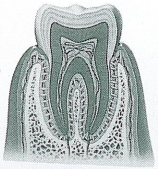
全10巻 完結

監修　東京大学名誉教授　水野丈夫



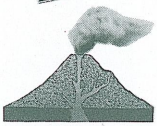
●第1巻
こんちゅう
監修　元東京都多摩動物公園園長　矢島　稔

●第2巻
どうぶつ
監修　東京都上野動物園園長　増井光子



●第3巻
しょくぶつ
監修　園芸研究家　浅山英一

●第4巻
みずのいきもの
監修　国立科学博物館　武田正倫



●第5巻
とり
監修　東邦大学理学部　長谷川　博

●第6巻
ひとのからだ
監修　愛育病院小児科部長　岡本　曉

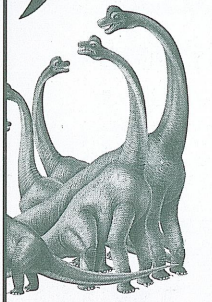
●第7巻
きょうりゅうとおおむかしのいきもの
監修　国立科学博物館　小畠郁生

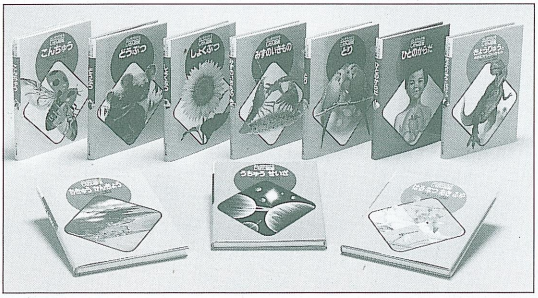
●第8巻 新刊
ちきゅうかんきょう
監修　放送大学教授　奈須紀幸

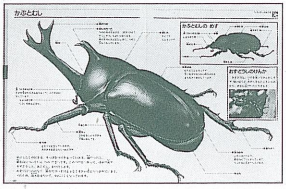
●第9巻 新刊
うちゅうせいざ
監修　五島プラネタリウム館長　村山定男

●第10巻 新刊
はるなつあきふゆ
監修　理科教育研究家　中山周平

A4判・上製本・本文116頁・定価各2,000円(税込)







- スーパーリアリズムのワイドな画面によって自然界への関心を高め、そのふしぎさに気づいていきます。
- 基本的な図鑑としての役割を十分にはたしながら、子どもたちの探究心や科学する心を育てます。
- なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える記事もとりあげました。豊富な写真とイラストを組み合わせで、眺めるだけでも楽しい構成です。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部 03（5395）6608（代）にお問い合せください。

キンダーブックの
フレーベル館